

第1章

栃木市の歴史的風致形成の背景

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

1 自然的環境

(1) 位置

栃木市は栃木県の南部に位置しており、東京から鉄道でも高速道路でも約1時間の距離にある。

南北約33.1 km、東西約22.3 km、面積331.5 km²で、市の東側をおやま小山市、しもつけ下野市、西側をさ佐野市、北側をかの鹿沼市、みぶまち壬生町、南側をのぎまち野木町、茨城県こが古河市、埼玉県かぞ加須市、群馬県いたくらまち板倉町と接しており、3県境（栃木・群馬・埼玉の県境が一点に集まる箇所）が平地に存在する稀有な地域でもある。

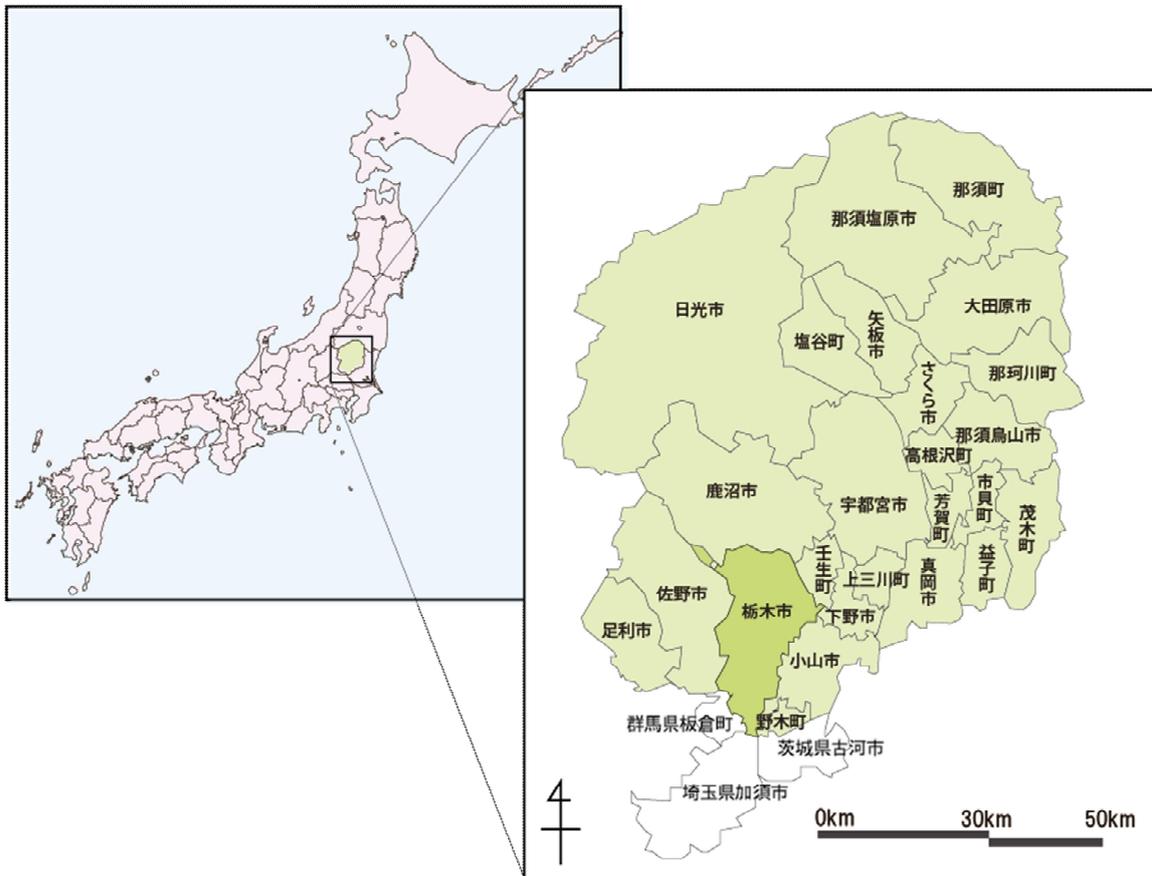


図 栃木市の位置

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

(2) 地形

栃木市の地形は、市域の大部分が関東平野の一部を成す平坦地で、北西部のみ足尾山地あしおに続く丘陵地を形成しており、それに伴い何本かの河川が足尾山地の東側の麓ふもとより南流し、市南端部の渡良瀬遊水地わたらせゆうすいちにおいて渡良瀬川わたらせがわへと合流する。

足尾山地は、1,000～1,300m級の高山が西よりの部分を北北東から南南西に向かって連なり、分水界を形成し、群馬・栃木両県の境を成している。この分水界を中心に、東側は緩やかな傾斜となり、南東方に次第に低下し、その緩やかな傾斜面をいくつもの河川が関東構造盆地へ向かって流入している。

① 山地

北部の山岳地帯には、大倉山おおくらやま(454.8m)、谷倉山やぐらさん(599.4m)、三峰山みつみねさん(604.9m)等の山々がそびえ、中央から西部には、太平山おおひらさん(341m)、晃石山てるいしさん(419.1m)、馬不入山うまいらずさん(345.2m)等の山々が連なっている。

② 河川

市の中央部から東南にかけては広大な関東平野が開け、市内には巴波川うずまがわ、思川おもいがわ、永野川ながのがわ、赤津川あかつがわ、渡良瀬川等の河川が流れている。

ア 巴波川

栃木地域川原田かわらだたんはつに端を発して市内中央部を貫流し、大平地域東部から小山市西部を経て渡良瀬川に合流している。市の代表河川であり栃木地域発展に歴史的役割を果たし、商品の輸送及び沿岸の灌漑用水かんがいとして利用されてきた。現在も灌漑用水及び防火用水として大きな役割を担っている。

イ 思川

粕尾山系に源みなもとを発し、各支流を集めて南下し、市東部で黒川くろかわを併せる。市内を流れ、小山市内を経て県南部で渡良瀬川に合流する利根川水系とねがわで、市東部及び以南の水田の灌漑に利用されている。

ウ 永野川

鹿沼市永野の深い谷川から発し、吹上西部山麓ふきあげを流れ、市内中央部を経て大平地域を貫流し、小山市中里付近にて巴波川に合流している。

エ 赤津川

永野川の支流で西方地域真名子の峽谷にしかたまなごきょうこくを源として、吹上伊吹山の東側の麓を流れ、永野川緑地公園付近で永野川に合流する。巴波川は、かつては大雨のたびに氾濫により大通りに水害をもたらし、市民を悩ませてきたが、赤津川分水工事が行われた後は、洪水から解放されている。

オ 渡良瀬川

北関東を流れる利根川水系利根川支流の一級河川で、流域面積は利根川支流の中では最大である。栃木市では、藤岡地域内を流れ、渡良瀬遊水地に入り巴波川、思川を併せる。

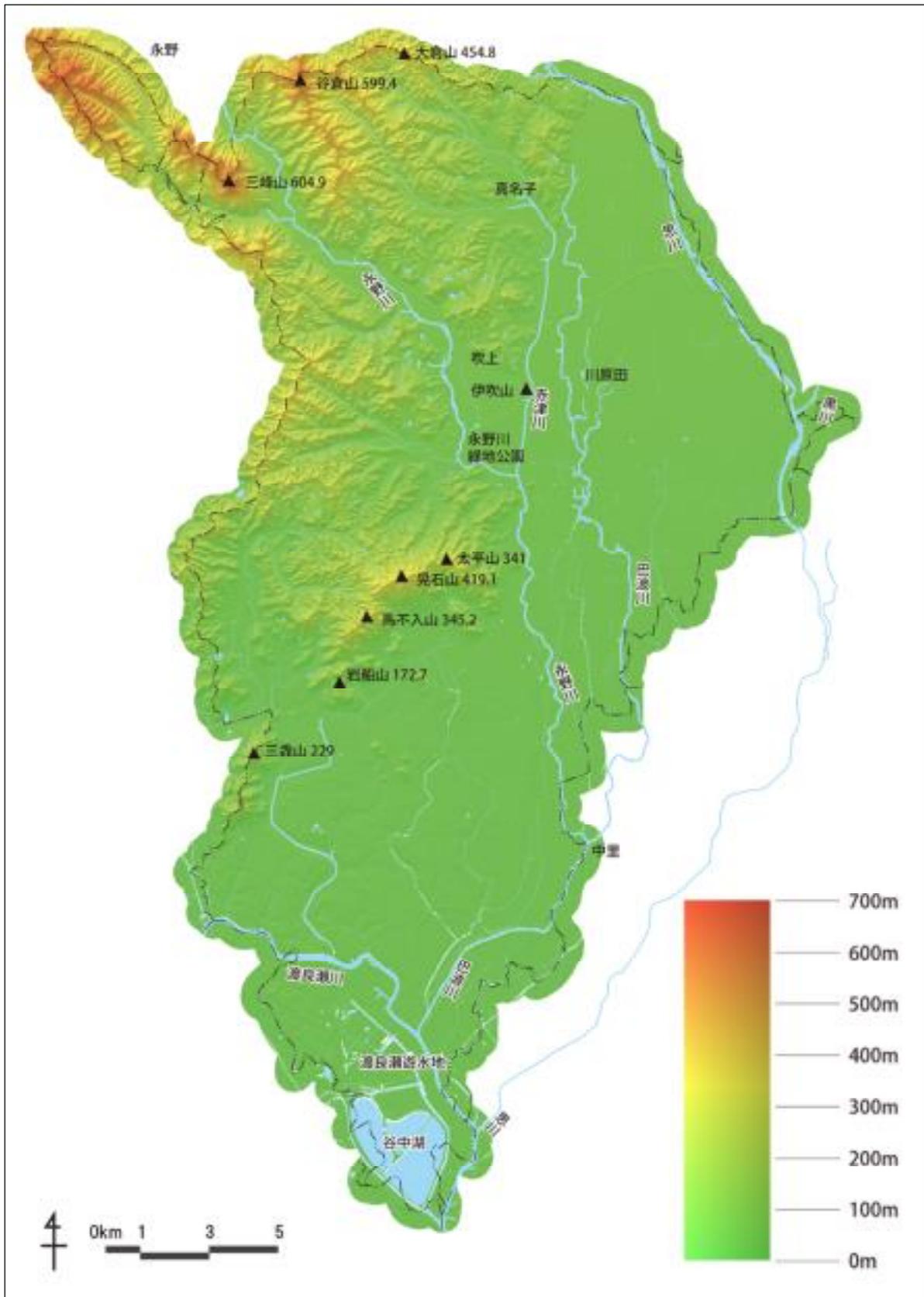


図 栃木市の地形

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

(3) 地質

栃木市の地質をみると、低地には沖積層が分布し、山地部には段丘堆積物が分布している。

このうち低地にみられる沖積層は、新生代第四紀新生(数10万年前から約1万年)の最も新しい時代の堆積物であり、多量の水分を含み、緩んだ状態で堆積している地層で、海岸平野や大河川沿いに厚く分布している。

一方、山地部を構成する地層は、主に古期岩類でチャート(岩石)や砂岩の堆積物から成っており、古世代二畳期から中生代ジュラ紀(約3億年から2億年前)のものであると考えられている。チャートは岩体、岩片とも著しく堅く、急傾斜や急崖をつくっている。

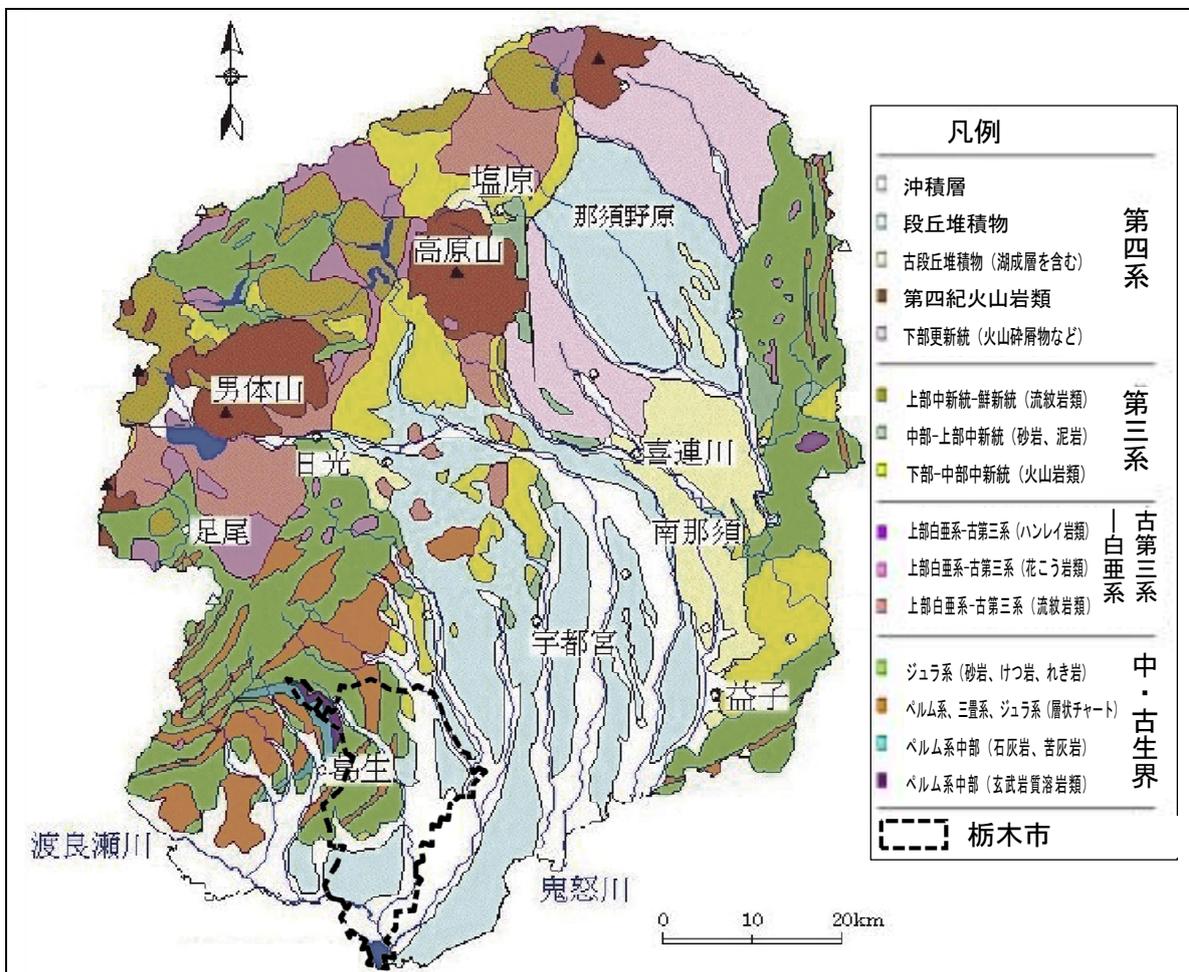


図 栃木県の地質

資料：『栃木の自然をたずねて』（築地書館刊）（一部加工）

(4) 気象

栃木市の気象は太平洋岸気候であるが、内陸部に位置するため、夏季は気温が30℃を超える日が多く、35℃以上の猛暑になる日もある。また、冬季は最低気温が-5℃以下に冷え込む日もあり、降雪日数が年に数日ある。近年の年平均気温は14.7℃となっている。

また、降水量は、夏季は多く多湿で発雷を特徴とし、冬季は少ないため乾燥する。近年の年間降水量は1,300mm程度となっている。

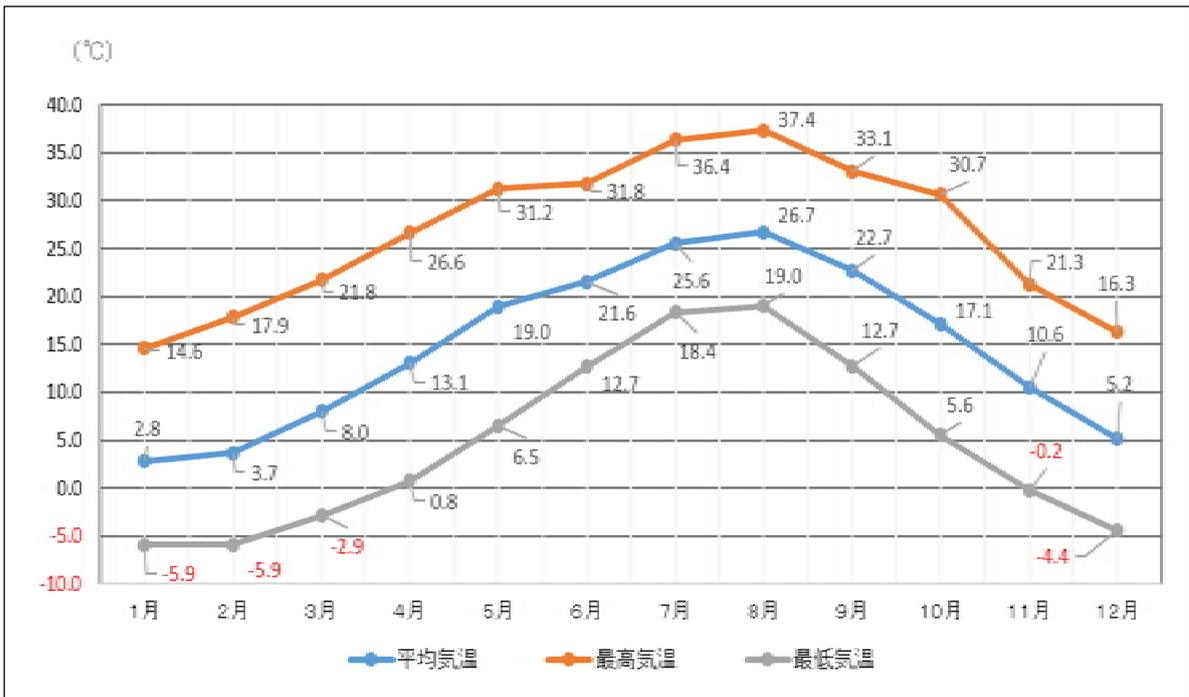


図 月別平均気温・最高気温・最低気温（平成24年（2012）～平成29年（2017））

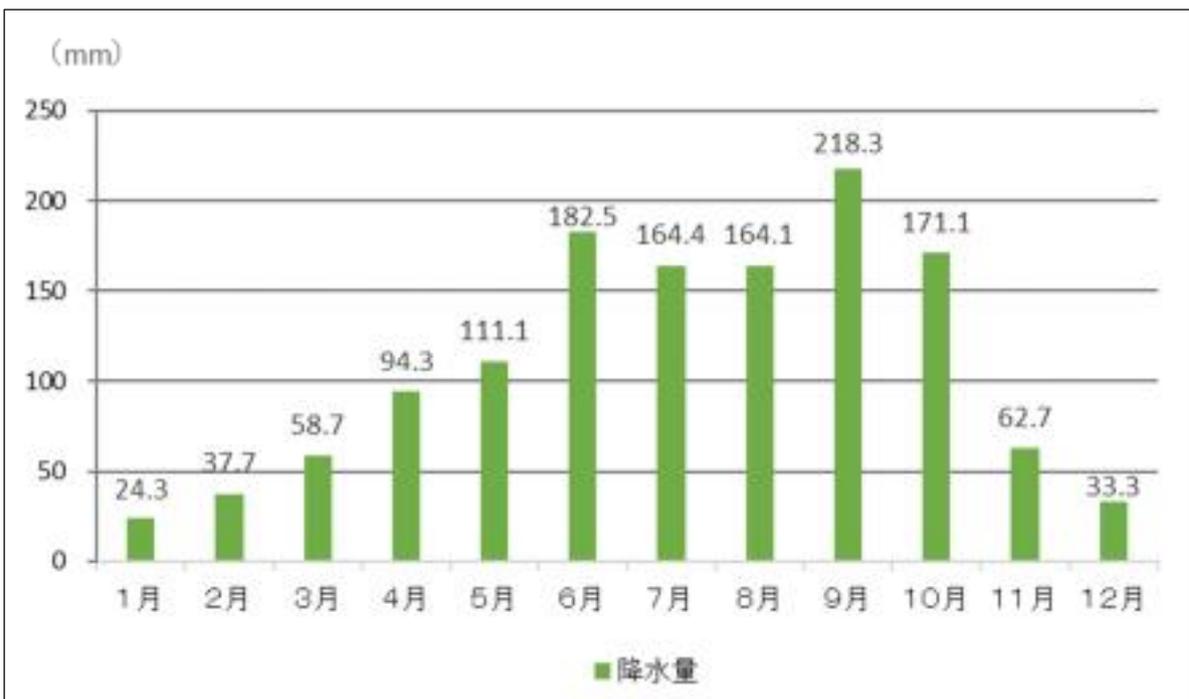


図 月別平均降水量（平成24年（2012）～平成29年（2017））

資料：栃木市消防本部

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

2 社会的環境

(1) 市域の変遷

栃木市は、平成22年(2010)3月29日に栃木市、大平町、^{おおひらまち}藤岡町、^{ふじおかまち}都賀町の1市3町が新設合併して誕生し、平成23年(2011)10月1日に隣接する^{にしきたまち}西方町を、平成26年(2014)4月5日に^{いわふねまち}岩舟町を編入合併した。

栃木市誕生までの歩み

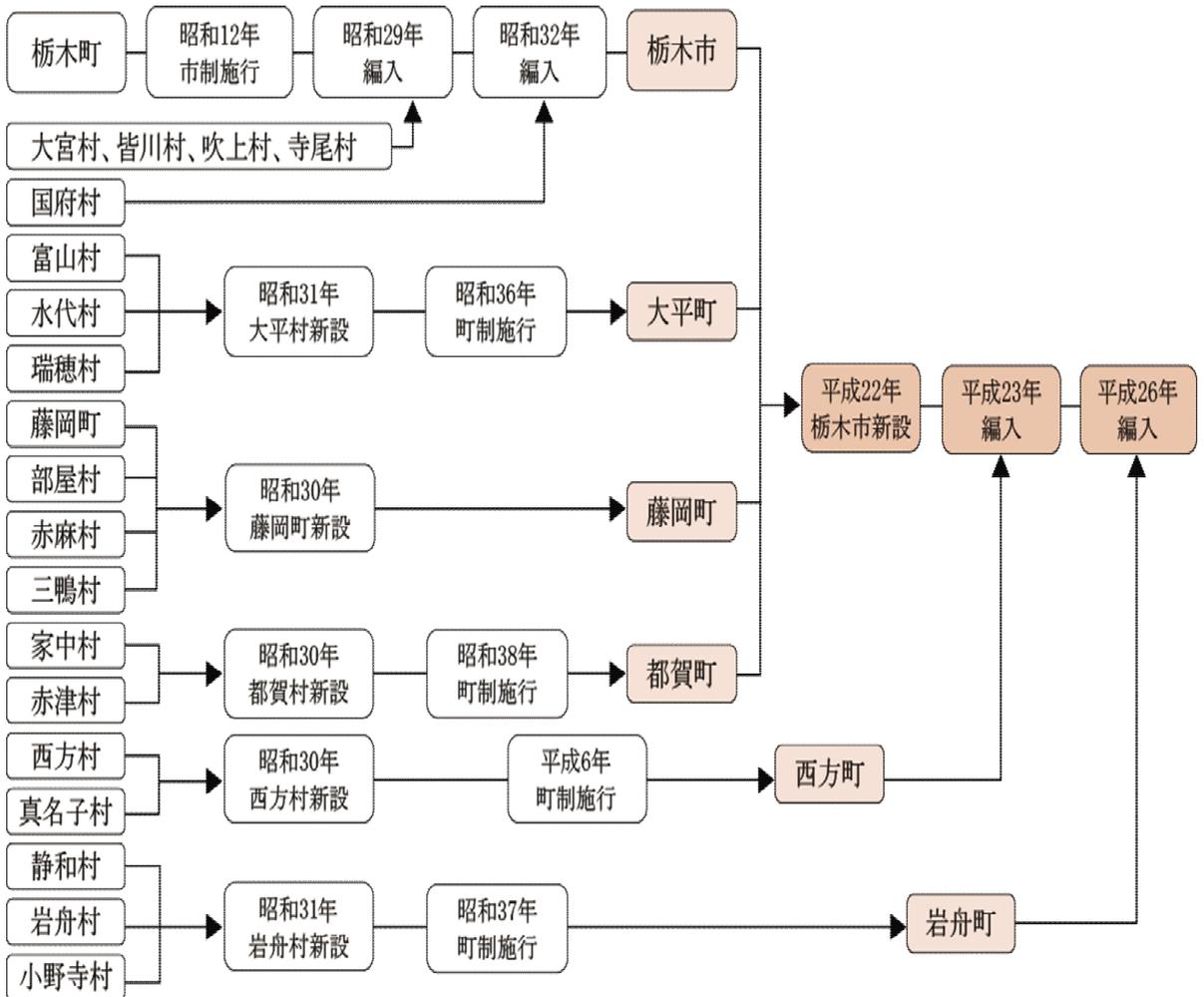


図 栃木市合併図

(2) 土地利用

栃木市の総面積 33,150ha のうち、田が 25.6%、畑が 7.9%、合わせると農地が 33.5%を占めている。

駅や幹線道路を中心とした都市的土地利用を田園・農村部等の自然的土地利用が囲む、比較的明確な空間構成となっている。

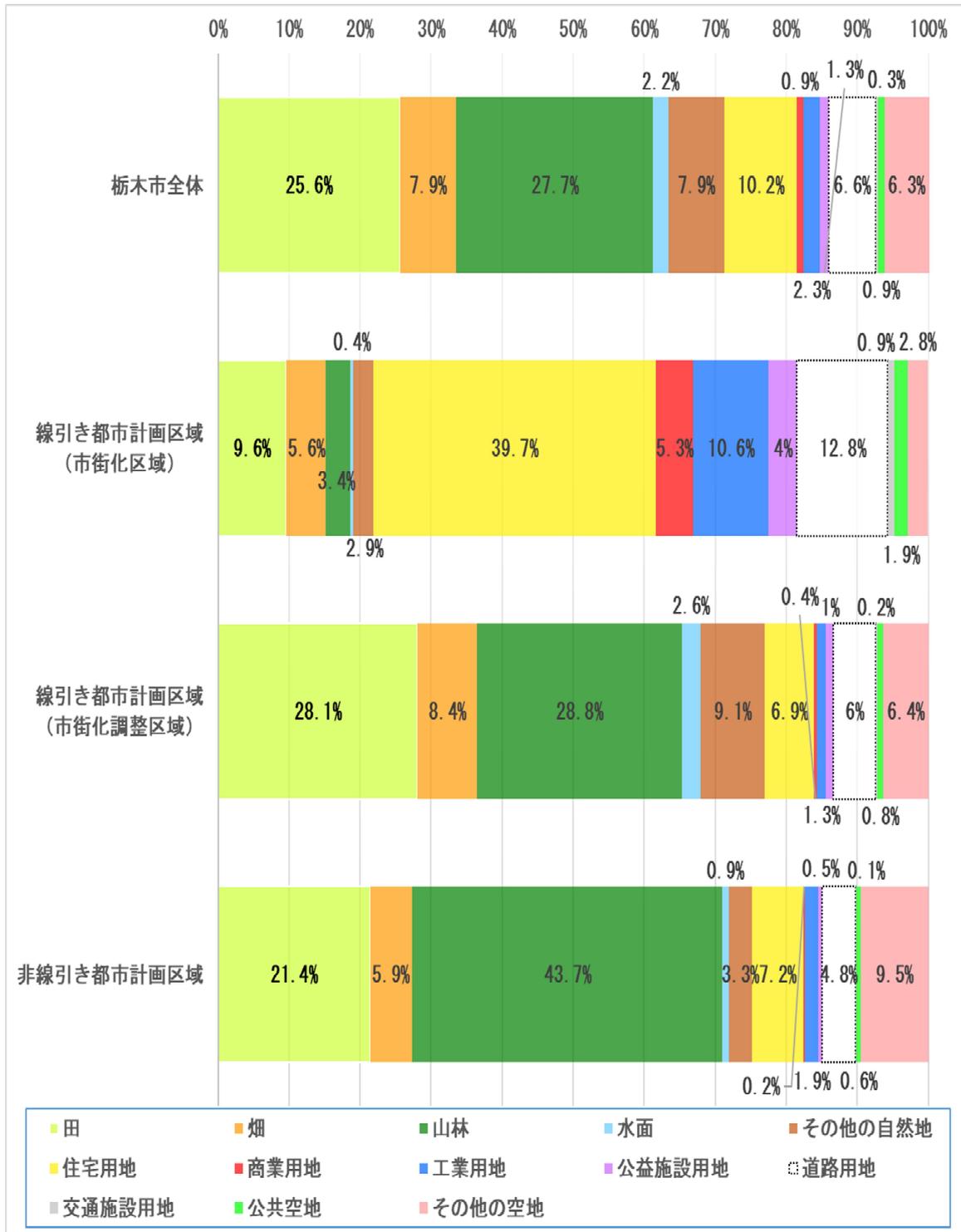


図 土地利用現況の割合

資料：平成 23 年度（2011）都市計画基礎調査

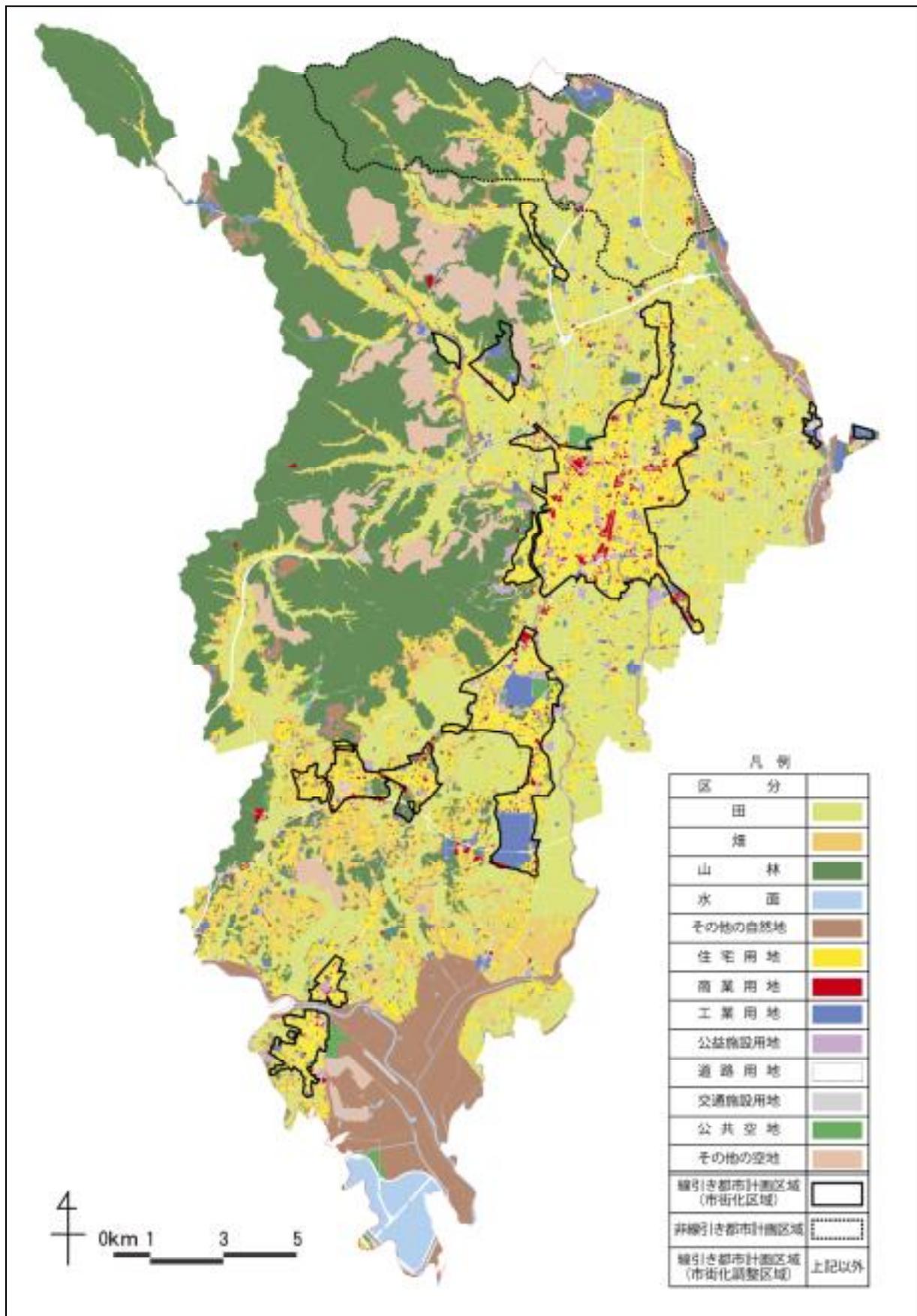


図 栃木市土地利用現況図

資料：平成23年度（2011）都市計画基礎調査（一部加工）

(3) 人口動態

栃木市の人口は、平成27年(2015)の国勢調査によると、159,211人となっており、平成2年(1990)まで増加したが、その後は減少傾向に転じている。

年齢別人口では、平成27年(2015)で、年少人口(15歳未満)18,963人(11.9%)、生産年齢人口(15~64歳)94,138人(59.1%)、老年人口(65歳以上)45,706人(28.7%)となっている。これを栃木県全体の年齢別人口割合(年少人口12.9%、生産年齢人口61.3%、老年人口25.9%)と比較すると、栃木市の年少人口・生産年齢人口割合は県値よりも低く、老年人口割合は高いことから、県内の他市町と比較して高齢化の傾向にある。

世帯数は、平成27年(2015)で、57,838世帯となっており、昭和60年(1985)以降緩やかな増加傾向にある。平均世帯員数は2.70人で、栃木県平均(2.54人)と比較すると多く、核家族化や単独世帯化の傾向は低いことが窺える。

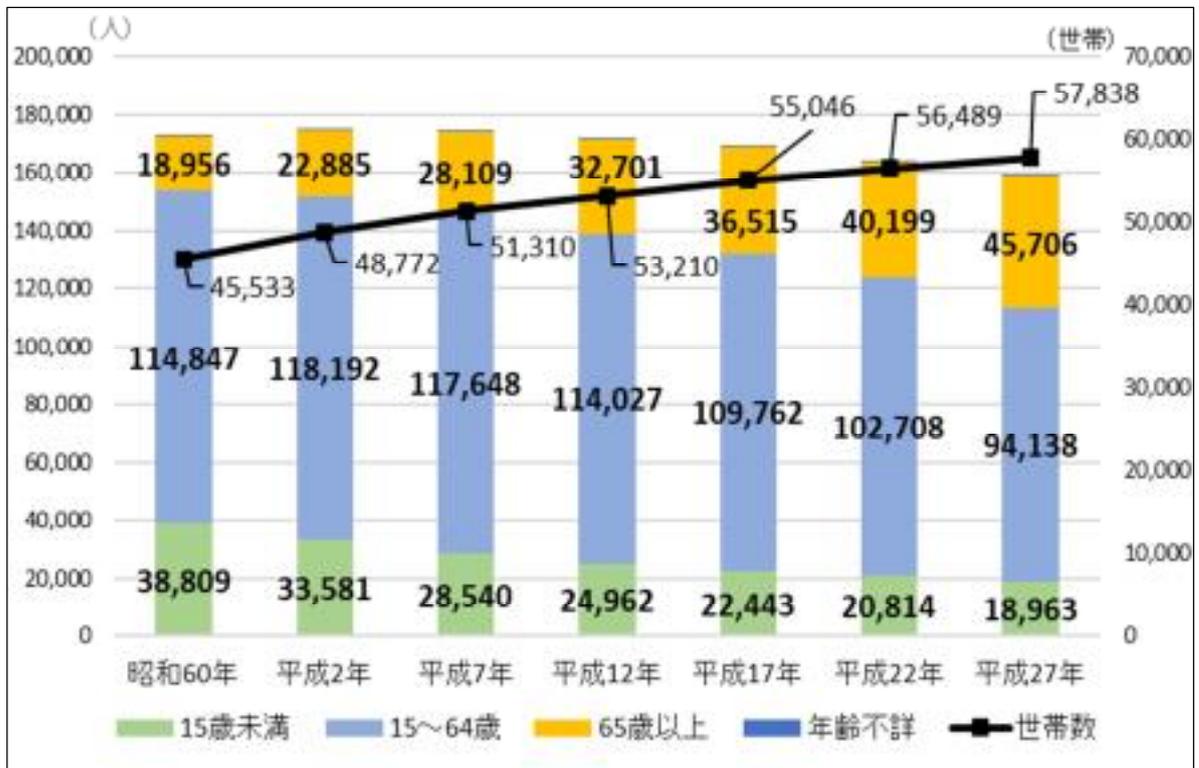


図 年齢別人口及び世帯数の推移

表 総人口及び年齢別人口構成比の推移 (単位:人)

	昭和60年 (1985)	平成2年 (1990)	平成7年 (1995)	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	平成22年 (2010)	平成27年 (2015)
総人口	172,613	174,717	174,305	171,755	168,763	164,024	159,211
年少人口(15歳未満)	22.5%	19.2%	16.4%	14.5%	13.3%	12.7%	11.9%
生産年齢人口(15~64歳)	66.5%	67.6%	67.5%	66.4%	65.0%	62.6%	59.1%
老年人口(65歳以上)	11.0%	13.1%	16.1%	19.0%	21.6%	24.5%	28.7%

注: 総人口には「年齢不詳」を含むため、合計しても100%にはならない場合がある。

資料: 国勢調査(外国人を含む)

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

(4) 交通機関

栃木市は、南北に走る「東北縦貫自動車道」に、「佐野藤岡」、「栃木」の2つのインターチェンジを有し、東西には「北関東自動車道」が通り、「都賀インターチェンジ」を有している。この2つの高速道路を、群馬方面からは「岩舟ジャンクション」、茨城方面からは「栃木都賀ジャンクション」が結び、物流の効率化や地域経済の発展に寄与する交通の要^{かなめ}の地域であるといえる。また、南部には、群馬、栃木、茨城を結ぶ「一般国道50号」が東西に通り、北部には「一般国道293号」が通るなど、県内外とのアクセス性に優れた道路網を形成しており、それぞれの沿道には、「みかも」、「にしかた」の2つの道の駅が設置されている。

公共交通では、「東武鉄道日光線^{にっこう}」、「東武鉄道宇都宮線^{りょうもう}」、「JR両毛線」の3路線、13駅を有し、市内や近隣自治体への通勤通学の足として、東京、埼玉方面への交通手段として、充実した鉄道網となっている。

バスは民間路線バスが1路線あるほか、市コミュニティバスである「ふれあいバス」が12路線あり、沿線住民の足として、また、定時性が求められる通勤・通学・観光の足として運行している。



写真 道の駅みかも



写真 道の駅にしかた



写真 ふれあいバス

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

(5) 産業

栃木市の平成27年(2015)の就業者総数は、77,548人である。農林漁業の第1次産業は、4,587人(5.9%)、輸送機械や電気機械製造業を中心とする第2次産業は26,224人(33.8%)、卸売業・小売業やサービス業などの第3次産業は44,821人(57.8%)となっており、就業者総数は減少傾向が続き、産業別就業者数割合は第3次産業が主体となっている。

平成22年(2010)から平成27年(2015)にかけては、第1次産業と第3次産業が減少し、第2次産業は概ね横ばいとなっている。

表 産業別就業人口の推移(単位:人)

	第1次産業	第2次産業	第3次産業	分類不能	就業者総数
平成12年 (2000)	6,456	33,829	47,202	257	87,744
平成17年 (2005)	6,208	29,540	48,373	464	84,585
平成22年 (2010)	5,000	26,584	46,284	1,264	79,132
平成27年 (2015)	4,587	26,224	44,821	1,916	77,548

注: 分類不能の産業とは、国勢調査の定義により「おもに調査票の記入が不備であって、いずれの項目に分類すべきか不明の場合、または記入不詳で分類し得ないもの」とされている。
資料: 国勢調査

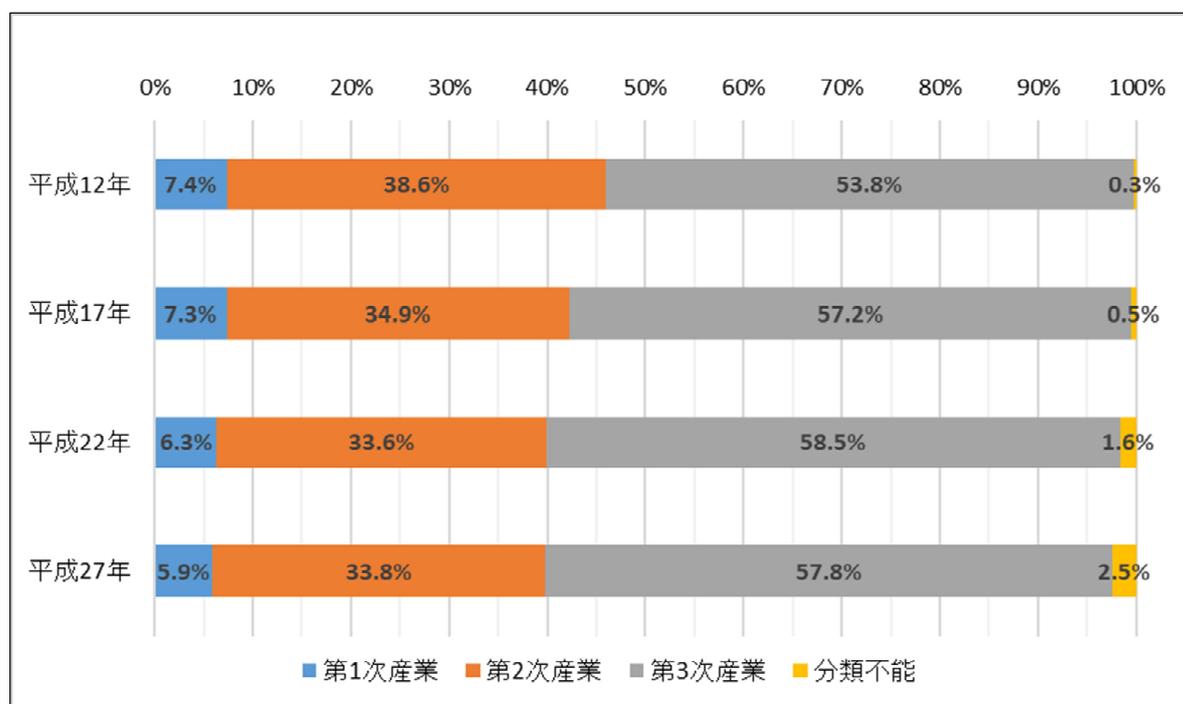


図 産業別就業者数割合

① 農業

栃木市の農家戸数は、5,461戸（県内第1位：平成27年（2015）農林業センサス）、農業振興地域の農地面積は、10,255haで、うち田については、約80%にあたる8,132haの大きな水田地帯があり、土地利用型農業※の盛んな地域である。

栃木市の農業経営の状況は、米・麦等の二毛作を中心とした土地利用型農業に加え、いちご・トマト・にら・ぶどう等の施設園芸が盛んである。平成27年（2015）の農林水産省統計資料によると二条大麦（ビール麦）は全国で第2位（県内第1位）、いちごは全国第5位（県内第2位）の生産量を占める。

また、近年トマト産地としての強化が図られ、収量の向上と年間を通じた出荷の実現による安定的な生産が可能となり、施設園芸の経営が着実に伸びてきている。

いちごやトマト等の農産物は、栃木市の農畜産物ブランドにも認定され、県内はもとより首都圏において高い人気と評価を得ている。

さらに、栃木市には、食の街道「とちぎ渡良瀬いちご・フルーツ街道」をはじめ、南北に2つの道の駅や16箇所の農産物直売所があり、地産地消の取組みが進められている。

一方、観光農業にも力を入れており、大平地域西部の太平山南山麓や岩舟地域南部では、^{きよほう}巨峰、シャインマスカット等のぶどうが栽培され、県内有数のぶどう団地を形成し、ワインやジュース、ジャム等の加工品を製造するなど、6次産業化※が図られている。

※土地利用型農業：効率的な土地利用を前提とした農業。多くの面積を要する露地栽培作物を栽培する農業経営。主に水田を中心とした農業。

※6次産業化：農林水産業者が生産（1次）、加工（2次）、販売（3次）まで一体的に取組んだり、2次、3次業者と連携して新商品やサービスを生み出したりすること。

表 土地利用状況（平成27年（2015）12月31日現在）

（単位：ha、（ ）内数字は構成比 %）

	総面積	農地			採草放牧地	混牧林地	農業用施設用地	混牧林地以外の山林・原野	その他	
		田	畑	樹園地						
農業振興地域	(100.0)	(60.4)	(47.8)	(11.2)	(1.3)	(0)	(0)	(0.2)	(8.7)	(30.7)
	16,997	10,255	8,132	1,906	217	2	2	40	1,472	5,226
農用地区域	(100.0)	(98.7)	(85.5)	(11.2)	(0.9)	(0)	(0)	(0.2)	(0.1)	(0.2)
	7,843	7,744	6,710	880	154	0	0	38	20	41
農振白地	(100.0)	(27.4)	(15.5)	(11.2)	(0.4)	(0)	(0)	(0)	(8.5)	(30.5)
	9,154	2,511	1,422	1,026	63	2	2	2	1,451	5,185

資料：栃木市農業ビジョン（平成29年（2017）3月）

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

② 工業

栃木市の産業は、製造業の割合が非常に高く、ものづくりが盛んな地域である。

平成29年(2017)の栃木市の事業所数は404所、従業者数19,568人、平成28年(2016)の年間製造品出荷額等は1兆0,922億3,124万円となっている。

推移をみると、世界的金融危機の影響を受けた平成20年(2008)から平成28年(2016)にかけて、事業所数が17.3%の減、従業者数が0.6%の減と減少傾向にあるものの、年間製造品出荷額等は33.4%の増と大幅に増加しており、生産の効率化・集約化が図られていると考えられる。

業種別の製造品出荷額等では、「電気機械」、「輸送機械」、「飲料・たばこ」、「食料品」が全体の約8割を占め、事業所数では「生産機械」、「金属」、「プラスチック」、「輸送機械」、「食料品」に関連する企業が全体の約半数を占めているが、バランスよく幅広い業種の事業所が立地している。

表 工業の推移

	事業所数(所)	従業者数(人)	年間製造品出荷額等(百万円)
平成20年(2008)	560	18,693	818,463
平成21年(2009)	498	17,795	703,256
平成22年(2010)	461	17,930	804,744
平成23年(2011)	493	16,814	542,648
平成24年(2012)	442	15,875	780,709
平成25年(2013)	432	17,557	856,225
平成26年(2014)	426	17,039	898,151
平成27年(2015)	-	-	1,105,884
平成28年(2016)	463	18,590	1,092,231
平成29年(2017)	404	19,568	-

資料：○事業所数、従業者数

工業統計調査(平成20年(2008)、21年(2009)、22年(2010)、24年(2012)、25年(2013)、26年(2014)、29年(2017))

経済センサス-活動調査[製造業](平成23年(2011)、28年(2016))

○年間製造品出荷額等

工業統計調査(平成20年(2008)、21年(2009)、22年(2010)、24年(2012)、25年(2013)、26年(2014)、28年(2016)、29年(2017))

経済センサス-活動調査[製造業](平成23年(2011)、24年(2012)、27年(2015)、28年(2016))

注：平成27年(2015)事業所数、従業者数は調査実施なし、平成29年(2017)年間製造品出荷額等は公表前

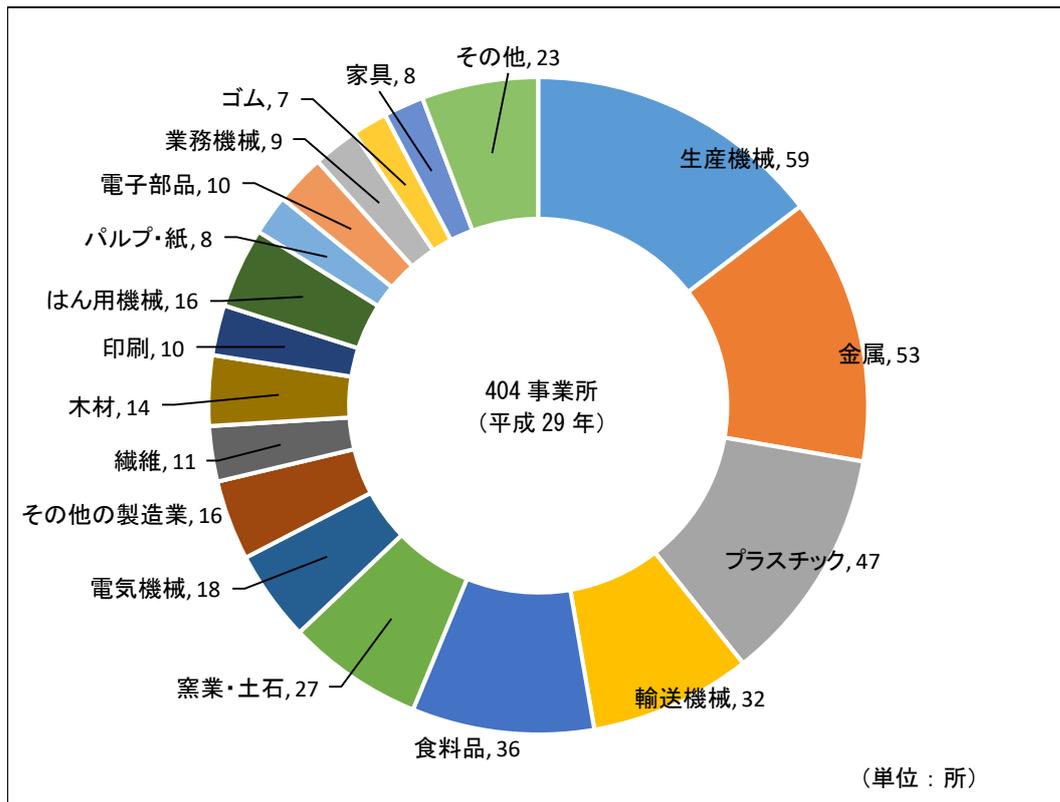


図 業種別事業所数

資料：工業統計調査（平成 29 年（2017））

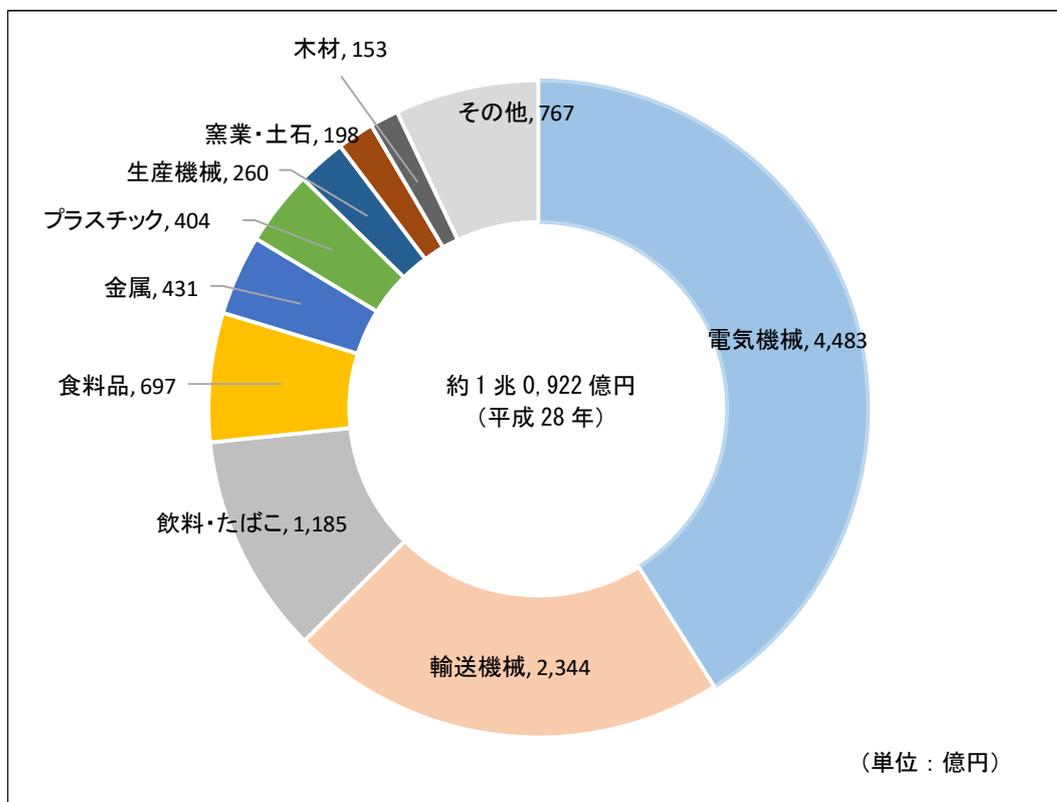


図 業種別製造品出荷額等

資料：工業統計調査（平成 28 年（2016））、経済センサス-活動調査[製造業]（平成 28 年（2016））

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

③ 商業

平成26年(2014)商業統計調査によると、栃木市の商業規模は、事業所数1,527所、従業者数9,614人、年間商品販売額2,776億5,834万円となっている。

推移をみると、平成6年(1994)から平成26年(2014)にかけて、事業所数が45.5%減、従業者数が28.7%減、年間商品販売額が30.7%減となっている。

表 商業の推移

	事業所数(所)	従業者数(人)	年間商品販売額 (百万円)
平成6年(1994)	2,801	13,488	400,679
平成9年(1997)	2,581	11,999	329,305
平成11年(1999)	2,631	13,114	345,349
平成14年(2002)	2,371	12,365	318,934
平成16年(2004)	2,224	12,140	308,324
平成19年(2007)	2,059	11,643	290,794
平成26年(2014)	1,527	9,614	277,658

資料：商業統計調査（平成6年(1994)、平成9年(1997)、平成11年(1999)、14年(2002)、16年(2004)、19年(2007)、26年(2014)）

小売業は、郊外の幹線道路沿いにスーパーマーケットなどの大規模店舗の出店が続いていたものの、個人・小規模企業等を中心として、事業所数は約半数まで減少している。また、年間商品販売額は約2割減少し、従業者数は約3割減少している。

卸売業は、事業所数が約3割減少し、これにほぼ比例して、年間商品販売額や従業者数も減少している。

近況としては、大平地域に店舗面積6,000㎡を超える大型家具店が出店するなど、大規模店舗の出店が続いている。

また、中心市街地においては、蔵の街大通りにドラッグストアやコーヒーショップなどで構成された複合商業施設が出店したほか、空き店舗を利用した新規出店が増加しつつあり、活性化に向けた動きとして期待されている。

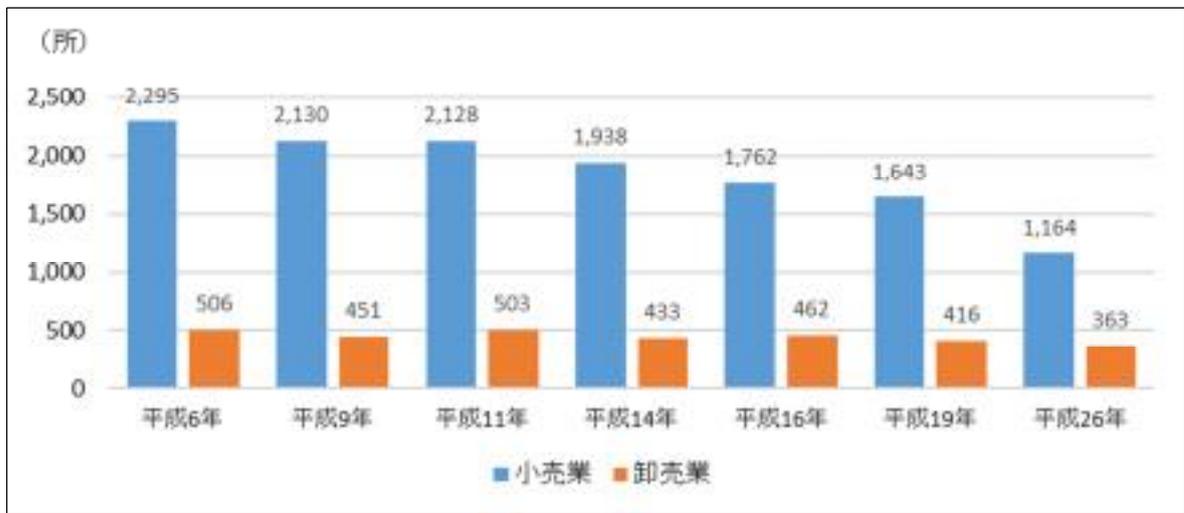


図 事業所数の推移

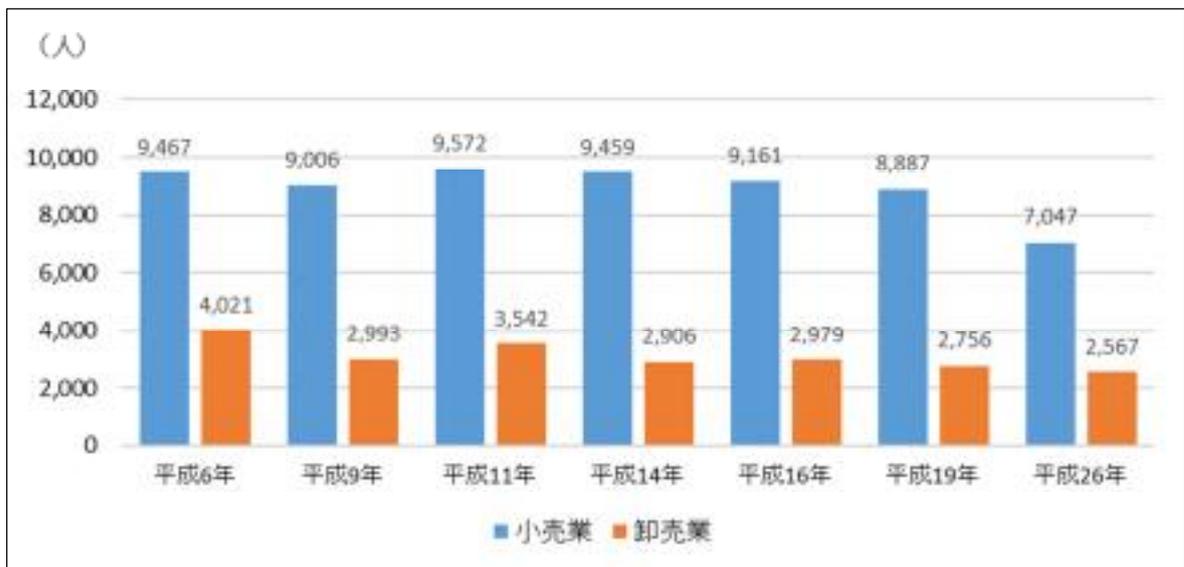


図 従業者数の推移



図 年間商品販売額の推移

資料：商業統計調査（平成6年（1994）、平成9年（1997）、平成11年（1999）、14年（2002）、16年（2004）、19年（2007）、26年（2014））

(6) 観光

平成29年(2017)栃木県観光客入込数・宿泊推定調査によると、栃木市の観光客入込数は5,600千人となっている。平成23年(2011)は、東日本大震災の影響を受け4,551千人まで落ち込んだが、平成24年(2012)は5,430千人まで回復し、以後5,500千人前後を推移し、平成28年(2016)には初めて6,000千人を超え、前年比6.9%伸びた。平成25年(2013)(5.9%減)、平成29年(2017)(7.2%減)は前年比で減少しているものの全体的には横ばい傾向にある。

これらの結果は、市民協働によるおもてなしの推進や、観光資源の磨き上げなどによるもので、リピーターや新たな観光客の獲得に繋がったものと思われる。また、近年、情報番組や映画、ドラマのロケなどの各種マスメディアに多く取上げられるようになったことも入込数増加に寄与していると思われる。

平成29年(2017)における主要観光施設の入込数は、「道の駅みかも」が最も多く468千人、次いで「みかも山公園(東口集計)」の399千人、「道の駅にしかた」の368千人となっている。

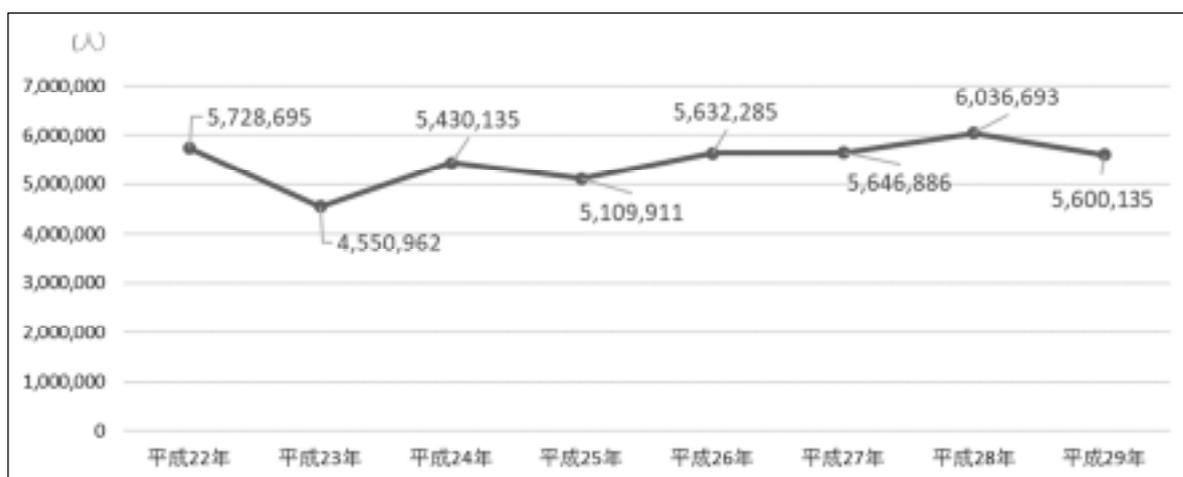


図 栃木市観光客入込数(平成22年(2010)～平成29年(2017))

表 主要施設等の入込数(平成29年(2017))

主要施設等名	入込数(千人)
道の駅みかも	468
みかも山公園(東口集計)	399
道の駅にしかた	368
とちぎ花センター	317
渡良瀬遊水地	255
みかも山公園(南口集計)	139
つがの里花彩祭(4月)	49
蔵の街サマーフェスタ(8月)	62

資料：栃木県観光客入込数・宿泊数推定調査

3 歴史的環境

(1) 原始・古代

① 旧石器時代

昭和40年(1965)に栃木地域星野町^{ほしのまち}でルヴァロア型^{せつ}石核^{かく}が発見され、栃木市教育委員会と東北大学考古学研究室による星野遺跡の発掘調査が実施された。当時3万2千年前頃に堆積したとされる赤城鹿沼軽石層^{あかぎかぬまかるいしそう}よりも古い年代で、旧石器時代でも前期旧石器時代とされ注目されたが、出土した珪岩製^{けいがん}旧石器^{せいじん}については自然成因説も出され前期旧石器時代の存否については決着していない。



写真 ルヴァロア型石核

しかし、この調査を契機に旧石器時代の研究も進展し、栃木市においては約10万年前まで遡^{さかのぼ}る地層が確認され、その後「星野遺跡地層たんけん館」の整備を行った。

また、栃木地域平井町^{ひらいちょうむこうやま}の向山遺跡^{むかやま}では昭和45・46年(1970・1971)に東北大学、平成6年(1994)に栃木市教育委員会の発掘調査が行われ、後期旧石器時代から縄文時代の長期に渡り、チャート露頭^{らとう}から石材採取・採掘を行った日本最古に属する原産地遺跡であることが確認された。



写真 星野遺跡縄文復元住居



写真 星野遺跡地層たんけん館



写真 向山遺跡発掘調査状況

他に遺跡としては西方地域の小倉水神社裏遺跡^{にししかた おぐらすいじんじやうら}や藤岡地域の後藤遺跡^{ふじおか ごとう}が知られている。

② 縄文時代

旧石器時代から気温が徐々に上昇したことにより、北極や南極、山河^{さん が おお}を覆っていた氷が溶け出し、海水面が上昇したため、海岸線が内陸の奥深くまで入り込む現象が起きた。栃木市域については藤岡地域南方の茨城県古河市付近まで入り込んだと考えられ、現在の渡良瀬遊水地^{わたらせゆうすいち}周辺は海水と淡水が交じる汽水域^{きすいいき}が形成されていたと考えられる。

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

この現象を表す代表的な遺跡が藤岡地域の篠山貝塚^{しのやまかいづか}で、長径約70mの馬蹄形状に貝層^{かいそう}が廻る遺跡である。発掘調査により、住居跡とともにヤマトシジミを中心^{ちゆうしん}にシカ・イノシシなどの骨やイタボガキ製の貝輪^{かいわ}も出土し、貝層の剥離断面標本とともに「藤岡歴史民俗資料館」に保管されている。



写真 篠山貝塚



図 藤岡地域周辺の貝塚分布（縄文時代前期）
（『藤岡町史通史編前編』より（一部加工））

関東平野の一部である藤岡台地には、旧渡良瀬川^{わたらせがわ}左岸^{ひだりがし}に藤岡神社遺跡^{ふじおかじんじや}があり、調査の結果、縄文時代前期から晩期（約6千年から2千6百年前）の拠点集落で住居跡等とともに数多くの遺物^{いぶつ}が出土した。このうち後期から晩期の精神生活の様相を知る上で貴重な資料として、イヌやイノシシなどの動物型土製品や蹲踞^{そんきよ}（腰を落として立膝をして座った）姿勢の土偶^{どぐう}と、約800点にも及ぶ耳飾りを含む1,244点の土器・石器・土製品・石製品・骨角・牙・貝製品が平成12年(2000)に重要文化財に指定されている。



写真 藤岡神社遺跡出土土偶

③ 弥生時代

金属器とともに稲作など大陸の技術が伝わり、大きな溝で囲まれた集落が、ムラやクニと呼ばれるようになり、その地域の首長^{しゅちやう}達は溝に囲まれ土を高く積み上げた「墳丘墓^{ふんきゆうぼ}」という墓を造った時代で、前期・中期・後期の3時期に分けられる。しかし、東日本では前期前半までは縄文時代晩期に含まれるため、前期後半から弥生時代となる。

栃木県及び栃木市域内においてこのようなムラと呼ばれるような遺跡は現在確認されていないが、中部地方から東北南部の前期後半から中期中頃にかけて、白骨化した先祖の骨を土器に入れ替え、穴にいくつも埋納^{まいのう}するという「再葬墓^{さいそうぼ}」と呼ばれる習俗^{しゅうぞく}が存在した。栃木市域では西方地域の弥八田^{やはちだ}遺跡と栃木地域大塚町の大塚古墳群内遺跡で調査されている。



写真 大塚古墳群内遺跡 人面付土器

④ 古墳時代

4世紀後半頃、藤岡地域の渡良瀬遊水地に近い巴波川右岸の低地に墳丘^{ふんきゆう}長96mの前方後方墳である山王寺大柵塚古墳^{さんのおおますづか}が造られた。出土遺物から、被葬者^{ひそうしや}は武人的性格を帯びると想定され、この地を治める支配者像^{しきい}が司祭的役割から武人的役割^{へんぼう}に変貌していく過程を示すものとして注目された。



第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

写真 山王寺大柵塚古墳

6世紀後半段階で、壬生町に跨る栃木地域大光寺町に、墳丘長が栃木県最大で国指定の遺跡（史跡）でもある吾妻古墳が造られた。墳丘1段目が平坦に造られ、その内側に前方後円形の盛り土が造成される。また、石室は大きな切石を使い、前方部に構築するなど、前代とは異なる形態を取る。



写真 吾妻古墳

このように東国では6世紀に前方後円墳の全盛期を迎えるが、この時期の栃木市域では大平地域富田の平坦地に墳丘長54mの前方後円墳であるオトカ塚古墳が造られた。



写真 オトカ塚古墳

この後、6世紀中頃から各地域に円墳を中心に古墳群が多数造られる。代表的な古墳群を挙げると太平山南東山麓に宅地造成中に確認された大平地域の七廻り鏡塚古墳が知られる。古墳は径約28mのやや歪んだ形の円墳であり、古墳群の中央に位置する主墳と考えられる。舟形木棺と副棺であると考えられる小型の組み合わせ式箱形木棺が発見され、舟形木棺からは、遺骸が確認された。屍蠟（蠟のように変化した死体）状態であるが仰臥（あおむけに寝ること）伸展葬（両脚を伸ばして葬る葬法）で衣服をまとった40歳前後の男性と推定された。副葬品は良好な状態で木装大刀（玉纏大刀含む）、黒漆塗弓、鉄鍬、鎬矢、鞆、堅櫛、毛織首飾り、馬具等が出土し、構築時期は遺骸と副葬品から6世紀中頃と考えられている。出土品は昭和61年（1986）に一括して重要文化財に指定されている。



写真 七廻り鏡塚古墳



写真 七廻り鏡塚古墳出土玉纏大刀

⑤ 奈良・平安時代

7世紀の中頃以降、日本の古代国家は中国の政治体制に倣い中央集権的な律令国家へと転換し、前代の首長達は、祖先をまつる場所として前方後円墳を^{しもつけ}下野古墳群に造営した。そして、^{おもいがわ}思川を挟んだ対岸の地である現在の^{たむらまち}栃木地域^{こくふ}田村町が下野国府の場所として選定された。栃木県の発掘調査により^{こくちやう}国庁域やその周辺の状況が判明し、昭和57年（1982）には国指定の遺跡（史跡）となった。



写真 下野国府の復元された前殿

^{みやのべ}宮野辺神社の南側で国府の中核となる^{こくちやう}国庁（政庁）跡が発見された。国庁は、^{せいむ}政務や国家の^{けんい}権威を示す^{ぎしき}儀式の場^{ほう}で、^{ちやう}方1町（約108m）四方の^{せいでん}囲いの中に^{ぜんでん}正殿・^{わきでん}前殿と左右の^{わきでん}脇殿からなり、中央は儀式のための広場となる。

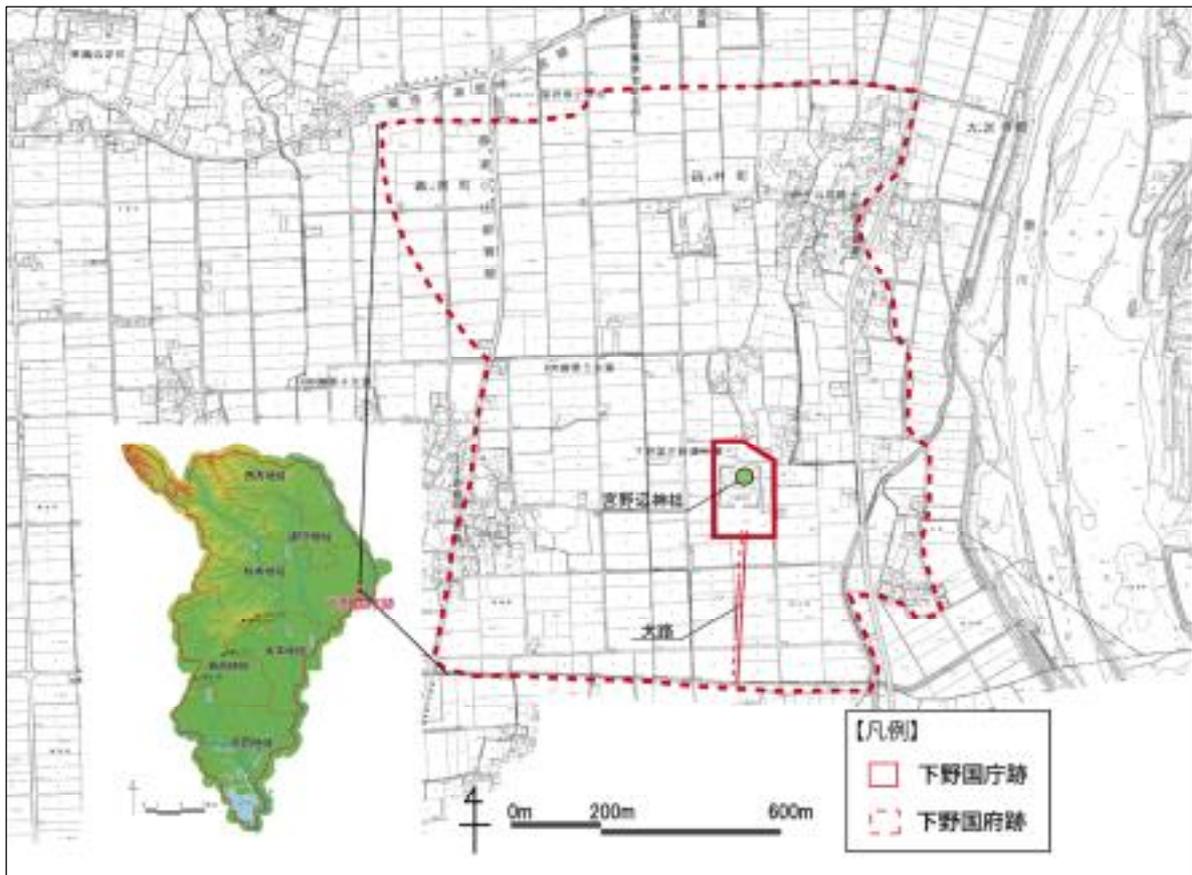


図 下野国府跡・下野国庁跡

他に、注目される遺構としては^{おおじ}大路がある。南大路は幅9mで国庁正面から南に延び、幅3mの側溝が付き、国庁から南へ約1.5町（約162m）の所では、東西に横切る溝と交差するため、橋が設けられていたという。国庁の南方約3町（約324m）の南大路西側では、整然と配置された建物群が見つかっており、「介」と書かれた^{ぼくしよどき}墨書土器が出土したため^{こくし}国司の^{やかた}館が想定された。

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

また、下野国府跡からは、非常に多量の遺物が出土しているが、注目されるものに墨書土器があり、「^{くにのくりやおり}国 厨 氷」と書かれた土器や円面硯、^{えんめんけん おおやけ}公 の文書の再利用である漆紙文書が100点以上も見つかっている。木簡については約5,200点以上出土し、天平元年（729）や延暦9・10年（790・791）の年号も確認されている。

この時代、^{ちやうてい}朝廷は地方を^{ごきしちどう}五畿七道の行政単位に分け、中央と地方の国府等を結ぶ道路網（^{えきでんせい}駅伝制・^{かんどう}官道）を整備した。^{えきれい}駅鈴（^{えきば}駅馬使用の鈴型の許可証）を携えた特定の重要かつ緊急な任務を帯びた役人や、^{ぜいもつ}税物等の物資の輸送及びこの時期特に重要視されたものに地方での反乱を鎮圧するための軍隊等の極めて限定された人馬が、中央と地方間を速やかに移動するための道路であった。このため、中継基地としての「^{うまや}駅家」が約16kmごとに設置され、駅家には駅馬を備え、旅行者の宿泊や食事・各種装備等を提供したとされている。

栃木市域を通る^{とうさんどう}東山道のルートについては、^{こうずけのくに}上野国 から^{あしかが}足利郡（^{つが}足利駅）、^{みかも}都賀郡（^{つが}三鴨駅）から下野国府の南限を通過したと推測されており、その先は^{かわち}河内郡（^{たべ}田部駅・^{きぬがわ}衣川駅）、^{はが}芳賀郡（^{なす}新田駅）、^{いわかみ}那須郡（^{むつ}磐上駅・^{むつ}黒川駅）へ、さらに陸奥国 白河へと繋がっていたとされている。

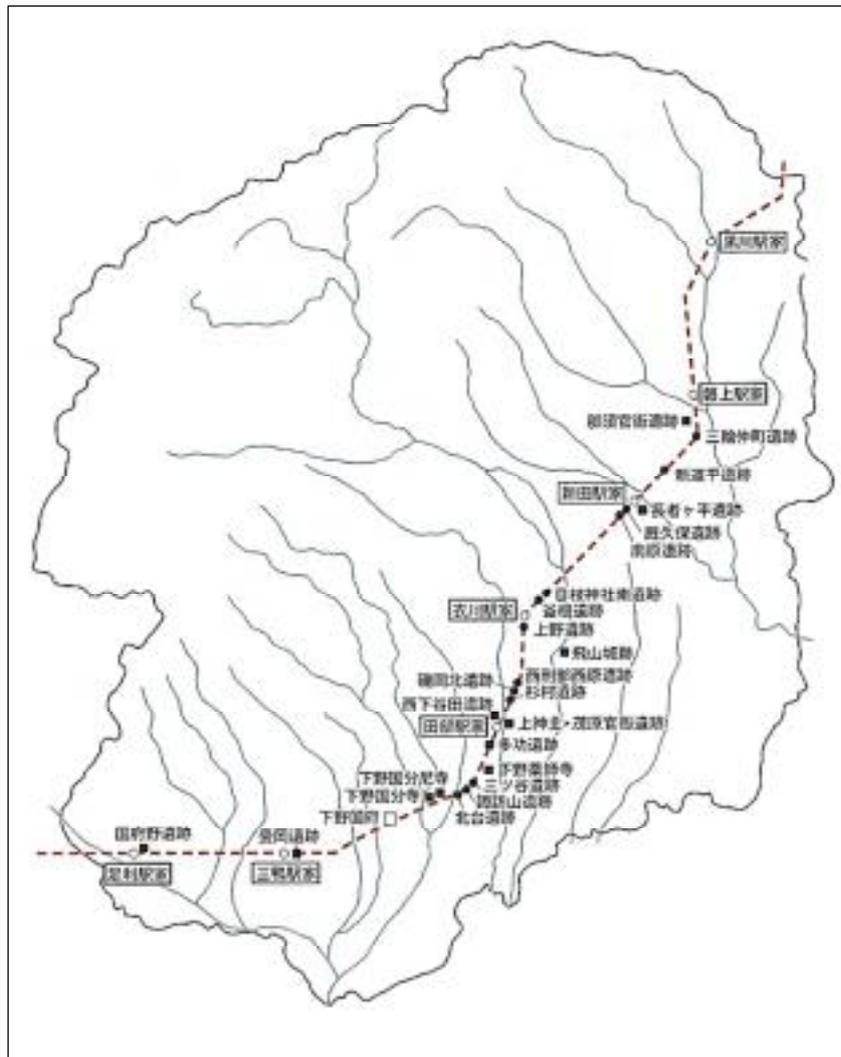


図 東山道推定ルート
（『西方町史』より）

古代都賀郡において忘れてはならないものに、^{ようぎょう}窯業生産がある。国家において^{かんが}官衙(官庁)及び寺院の^{こんりゅう}建立等が続けられる中で行われたものであるが、^{さの}佐野市^{みかもさんろく}三叢山麓から^{いわふね}岩舟地域^{おの}小野寺及び^{ふたご}藤岡地域にかけて^{ようせきぐん}三叢山麓窯跡群と呼ばれ、^{しもつけのくに}下野国随一の窯業生産地であったことが判明している。岩舟地域では^{おおしほら}大芝原窯跡ほか15箇所、藤岡地域でも^{はたぼり}幡張窯跡があり、^{すえき}須恵器窯跡も含めると37箇所の窯跡が確認されている。発生としては、周辺に古墳時代の^{はにわかま}埴輪窯も存在するため、前時代から^{こうじん}技術的基盤を持つ^{こうじん}工人(職人)が居住し、良質の粘土・燃料が確保されることによるものと思われるが、国府とも比較的近距离で東山道も通過するため^{こうち}運搬にも好地であると考えられる。

さらに、藤岡地域では^{おおまえ}大前製鉄遺跡群と呼ばれる22箇所の製鉄遺跡が存在する。^{かじ}県南地域の^{うかが}拠点的な製鉄遺跡で、鉄生産と鍛冶(鉄器生産)を^{うかが}窺わせる。時期は9世紀前半から10世紀中葉と思われる。三叢山麓窯跡群と大前製鉄遺跡群は時期がほぼ同じで近接するため、同じ勢力(経営者)であったと推察されている。

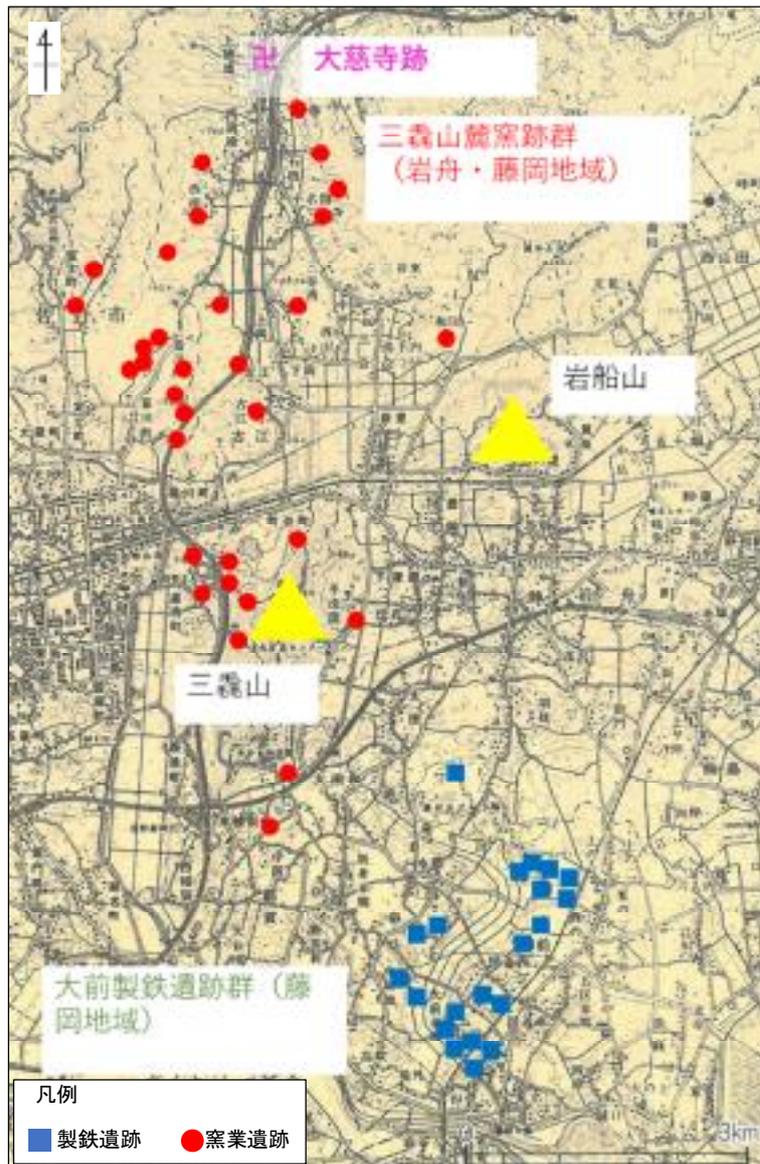


図 製鉄遺跡・窯業遺跡
(『藤岡町史通史編前編』より(一部加工))

(2) 中世

下野国庁終末期は10世紀前葉で、国府所在地域としての終末期は11世紀中頃と検討されているが、前代より中世への国衙機構を運営してきた在地最有力者は在庁官人ざいちょうかんじんの下野大掾だいじょう小山氏おやまであると考えられる。栃木市域については皆川氏みながわを中心とするものであるが、他に宇都宮氏系つのみやの西方氏にししかたや佐野氏系さのとされている小野寺氏おののてら・木村氏きむら・鍋山衆なべやまが考えられる。

下野の各武士団は、源頼朝みなもとの鎌倉幕府かまくらや足利尊氏あしかがたかうじの足利幕府開設に力を注ぎ、幕府内の勢力争いや各地域間及び一族内の抗争を戦い抜いた。その後、戦国時代には後北条氏ごほうじょうしによる北進に伴い生き残りを賭けた従属じゅうぞく・離反りはんを繰り返すものの、羽柴秀吉はしばひでよしの小田原征伐後から徳川家康とくがわいえやすの江戸幕府初期かいえきに改易かうえきや領地没収だんぜつにより断絶ぼつらく・没落よぎを余儀なくされたが、地域に根差した文化や風習は受け継がれている。

① 川原田合戦かわらだ（都賀地域合戦場つが・升塚かっせんば・ますづか）

大永3年（1523）10月、宇都宮忠綱ただつなは南摩地方なんま（鹿沼市）を奪い南下し、皆川（栃木地域皆川地区）むねなりを目指した。対する皆川宗成なりあきはその弟、成明とともに川原田に陣を張り迎え撃った。しかし、宇都宮氏の大軍勢に皆川宗成も、平川城ひらかわを守っていた弟の成明も討ち死にした。まさに総崩れの間際、小山氏・結城氏・壬生氏の加勢ゆうきが入り、宇都宮氏を押し返したと伝えられる。

当時、この一帯は川原田と呼ばれていたが、この激戦の地をそれから合戦場というようになった。また、人々はこの戦死者を敵味方問わず埋葬し塚を築き、傍らかたわに普門院ふもんいんを建立くようし供養した。この塚は基壇きだんが12けん間四方ちくせいの3段築盛きとで升塚きとといい、この郷も升塚と呼ばれるようになった。



写真 升塚

この西方にはシラジ沼があるが、修羅地が転じたものともいわれる。シラジ沼から南側に接するしめじが原は清水が湧き出す所で、巴波川の源流でもある。

② 沼尻合戦古戦場（藤岡地域大田和・甲・都賀）

天正12年（1584）5月から7月の3箇月間、三轟山南東山麓で北条氏政・氏直の北条軍と佐竹義重・宇都宮国綱を中心とする北関東の領主達が雌雄を決するため対峙した。

時期を同じくして豊臣秀吉と徳川家康の天下の後継者を決める小牧・長久手の合戦が行われていた（長久手の戦いは4月9日）。当時、北条氏は徳川家康と同盟関係にあり、一方、佐竹氏・宇都宮氏は豊臣秀吉に与しており、互いに連携を取っていた。

7月半ば、北条方が佐竹氏・宇都宮氏の退路となる北側の岩船山を取ったことが引き金となり、合戦が終了した。



図 沼尻合戦
 (『藤岡町史通史編前編』より)

(3) 近世

① 城下町栃木の始まり

皆川^{ひろてる}広照は豊臣秀吉の小田原攻めの後、徳川家康を通じ降伏したため本領安堵^{ほんりょうあんど}となり、皆川へ戻り、天正19年(1591)に栃木城^{とちぎじょう}を築くとされている。しかし、天正12年(1584)の広照書状(皆川文書^{もんじょ})で「拙者新地^{しんち}を存じ立て油断なきの間」とあることから、新地を栃木城とすれば沼尻合戦の頃から築城計画は進んでいたものとも推定されている。



写真 栃木城の一部掘割とその石垣が残る

また、城下町の建設に関しては諸社寺の移転からみると、円通寺^{えんつうじ}を天正7年(1579)に現在の地へ移転^{しんめいぐう}している。神明宮^{むなふだ}は棟札からみるに、応永10年(1403)の創建の後、天正17年(1589)に移転した。近龍寺^{きんりゅうじ}は応永28年(1421)に栃木城内^{じょうない}の宿川原^{しゆくがわら}に建立され、天正16年(1588)に移転している。他に満福寺^{まんぶくじ}、定願寺^{じょうがんじ}、長清寺^{ちようせいじ}等も円通寺移転の頃から築城の天正19年(1591)までには移転したと推定されている。他に、円通寺文書には「天正十四年丙戌栃木町立初ル」とあることから、城下町建築のための準備及び整備は天正7年(1579)には始められていたと考えられる。

しかし、皆川氏は慶長14年(1609)には取潰され、城は破却^{はきやく}された。



写真 神明宮



写真 近龍寺

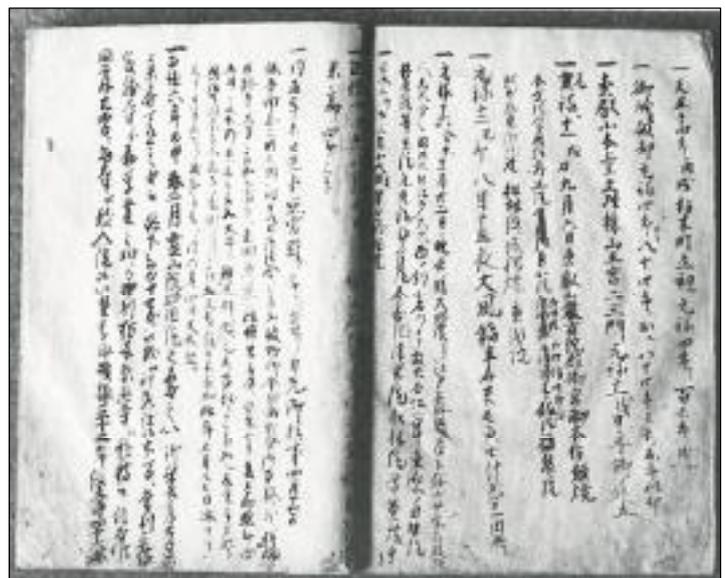


写真 『円通寺文書』

(天和2年(1682)から元禄15年(1702)までにわたる過去帳)

② 栃木町の支配と陣屋

栃木町は、皆川氏の後、榎本城^{えのもと}の本田忠純^{ほんただだずみ}の支配となるが、慶長18年(1613)の検地^{けんち}を行ってからは他藩の支配や天領^{てんりょう}となり廃藩置県^{はいはんちけん}を迎えることとなる。

この間、栃木市域内には足利藩陣屋^{はたけやま}、畠山陣屋^{ふきあげ}、吹上藩陣屋、西方陣屋、皆川陣屋^{ふかさわ}、深沢陣屋、藤岡陣屋が設けられた。

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

栃木町は栃木城の城下町として整備され（『栃木市史通史編』より（一部加工））
たが、その後大きく発展するきっかけとなる出来事は徳川家康の死去であった。家康の遺言により遺霊は下野の日光山に改葬されることとなり、東照権現社造営や大法会等に必要な物資を栃木町で陸揚げし日光へ送った。この出来事によって栃木町は街道沿いで人馬の継立（宿ごとに人馬をかえて送ること）を行う宿駅としての機能を持つこととなり、併せて巴波川の遡航終点河岸としても公認された。こうした日光社参のための例幣使街道の整備・宿場の創設によって栃木町は陸上交通の要地と物資集散市場との二つの性格を兼ね備えた商人町となり発展した。

日光例幣使街道については、上野国倉賀野（高崎市）から犬伏（佐野市）を通過し、栃木市域では富田宿から栃木宿、合戦場宿、金崎宿と続き、楡木（鹿沼市）で壬生通り（日光西街道）へと入る。各宿場には本陣（脇本陣）や旅籠屋が設けられ、伝馬問屋が昼夜の別なく人足と馬を常備した。なお、日光例幣使については正保4年（1647）から慶応3年（1867）まで続けられた。

舟運については、栃木河岸は巴波川を遡った終点に位置し、江戸方面からの荷物は部屋か新波河岸で小舟に積み替えて、曳綱をもって遡航し、栃木河岸からの諸荷物は部屋か新波河岸で大舟に積み替えて送った。部屋河岸が積み替え河岸であるため、巴波川の河岸組合は部屋組といった。また、栃木から部屋河岸の間には沼和田、下高島、上川原田（小山市）、鏡（小山市）、緑川に舟渡場があった。

街中においては、馬市や丈間（稲わら、麻の織物）等商品によって日を替えた市（通称六斎市）が開かれ賑わいを見せ、栃木町は活気に溢れ、商人の富とともに和歌、狂歌、俳句、折句の他に謡、長唄、浄瑠璃など遊芸の町としても知られるようになり、有名無名の文人墨客が町を訪れた。

④ 幕末の動乱

尊王攘夷運動も激化する中、水戸藩内の尊王攘夷に関わる慎重派と過激派の派閥抗争に端を発し、急進的な尊王攘夷派は筑波山に挙兵し、聖地日光東照宮を占拠して攘夷の軍事行動に出る構えを見せた。これに対して連絡を受けた近隣諸藩は兵を動かしたため、水戸浪士隊は西に進路を変え栃木町へと進んだ（この急進的な尊王攘夷派でも西進した一派を通称天狗党と呼ぶ）。隊は総勢250名で、栃木町に着いたのは元治元年（1864）4月14日であった。彼らは太平山の多門院を本陣とし周辺に宿泊した。騒動を恐れた栃木町の商人達は軍資金を集め献金し、一行は5月30日には栃木町を出た。しかし、隊から分かれた一隊が6月5日に引き返し、軍用金要求等で騒動となった。

翌夕刻、浪士達は、足利藩陣屋へ談判に押しよせ衝突し、用意しておいた松明に火を点け、家々に投げ込みながら逃走していった。町は下町を中心に大火となり全体で237軒が焼け、さらに数人が殺害されている。これを栃木では愿蔵火事と言い伝える。この火事を含め江戸末期には4回の大火に見舞われたことから、これを教訓に土蔵造りの建物が増えたともいわれる。

月 日	天 狗 党 の 動 向
3月27日	○天狗党 筑波山へ結集。
4月3日	○天狗党 日光山へ向かって筑波山出発。
4月9日～ 4月10日	○天狗党 日光参詣。
4月11日	○天狗党 日光より太平山へ向かう。
4月14日～ 6月1日	○天狗党 太平山へ滞陣。
6月5日	○天狗党 壬生藩などと交渉の後、本隊は筑波山へ向かう。
6月6日	○天狗党 田中愿蔵隊栃木町を焼く。
6月7日	○天狗党 田中愿蔵隊小山宿を経て筑波山へ向かう。
6月9日	○幕 府 川越・谷田部・下妻・宇都宮・壬生・結城・下館・土浦・府中・足利・宍戸の諸藩に天狗党追討を命じる。

図 元治元年（1864）の水戸天狗党の動向
（『栃木市史通史編』より（一部加工））

その後、徳川慶喜は^{とくがわよしのぶ}大政奉還の上^{たいせいほうかん}表^{じょうひょう}をなし^{ちやうてい}朝廷はこれを承認したが、討幕派、特に薩^{さつ}摩藩^まはこれを不服とし幕府を挑^{ちやうはつ}発し、開戦に導こうと江戸市中で乱暴をはたらかせたり、別動隊を関東の要所に派遣して討幕の義兵をつのった。この一つとして浪士達が出流に集った出流山事件があり、世直し一揆騒動も起きた。このように戊辰戦争前後、栃木町や周辺の村々も、打ちこわしに襲われる恐れはあったが、米麦や金銭等を与えることによって巧みに回避した。

(4) 近現代

① 時代の流れ

大政奉還がなされ、新政府は慶応4年（1868）に真岡代官の支配地を治めて真岡県とし、佐賀藩士を知県事に任命したことから、栃木市内の天領の村々は真岡県となる。明治2年（1869）に日光県が設置され、旗本領であった村々と^{いづはらはん}巖原藩（^{つしまふちゆう}対馬府中藩）領分はその管轄下に入り、大名領は吹上藩県・足利藩県・六浦藩県・古河藩県・関宿藩県・壬生藩県というように、それぞれの藩県に属した。

その後、^{はんせきほうかん}版籍奉還がなされ明治4年（1871）^{みことり}廃藩置県の詔が出された。下野国は栃木県と宇都宮県とに分かれ、ついで明治6年（1873）には栃木県に統一され、栃木町に県庁が置かれた。庁舎については敷地周囲に堀が廻らされるとともに、巴波川から直接舟が着くように^{そうきよ}漕渠（^{けんちやう}県庁の堀と^{ほり}巴波川を繋ぐ堀）も造られた。同年、大通りには36基の^{がいでう}街燈（ガス燈）も



写真 栃木県庁
（明治10年（1877）頃）

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

設置され、県庁所在地としての景観も整えられた。旧県庁の堀と漕渠は、平成8年（1996）に県指定の遺跡（史跡）となっている。

新時代へと変貌^{へんぼう}を遂げていく明治期、西南戦争^{ちんあつ}の鎮圧で武力による反抗が抑えられると、言動の力で民権^{みんけん}を主張して政府の専制^{せんせい}に対抗する自由民権運動が起こった。明治14年（1881）の栃木県の自由党員^{とうと きふう}の数は全国2位で、その中でも栃木町を中心とした下都賀郡が多数を占めた。これはこの地域が経済的にも先進的であり、特に栃木町は古くから自由を尊ぶ^{とうと きふう}気風があったこと、学塾^{がくじゆく}を中心とした教育の高まりが批判的精神を生んだこと、併せて水戸天狗党事件や出流山事件等が政治に目を向けさせたことなどが考えられる。

このような時代の趨勢^{すうせい}の中、県令^{けんれい}（県に置かれた長官の呼び名）の三島通庸^{みしまみちつね}は栃木県に着任すると明治17年（1884）自由党急進派の一部と衝突しながらも県庁を宇都宮へ移した。

② 街の移り変わり

県令が三島通庸となる以前、大通りは中央を幅1間（約1.8m）の堀が流れていたが、県令の指示で堀は通りの両側に付け替えられ、さらにその外側に歩道が設置された。工事施工は強制的であったが、道路が広がった。交通網の整備が施行される中、鉄道では東北本線誘致運動が進められたが、巴波川の舟運^{おんけい}から恩恵を受けていた人々からの反対も多かったとされている。東北本線は浦和^{うらわ}から宇都宮への直線的ルートと決定してしまうが、この時の熱心な誘致運動も契機となり、明治21年（1888）には^{りようもう}両毛鉄道（現在のJR両毛線）が開通する。

文明開化も一層進められ、明治22年（1889）には町村制が施行され、村々も新しい町村へと変貌^{へんぼう}して行くこととなる。街には自動車も走るようになり、明治44年（1911）には電気も通り電灯がつき、産業は機械化が進んだ。大正15年（1926）にはバスの運行も始まるが、隆盛^{りゆうせい}を誇った舟運は衰退^{すいたい}の道^{たど}を辿った。昭和4年（1929）に東武鉄道日光線が、続いて昭和6年（1931）には東武鉄道宇都宮線が開通した。他に、栃木県最初の写真館第一号も開かれた。



写真 明治20年代の大通り



写真 二代目栃木駅舎
（明治43年（1910））

③ 商業都市・産業の移り変わり

政府は明治4年(1871)に江戸時代以来の貨幣制度を廃して、明治5年(1872)に国立銀行制度を布き、国立銀行が銀行券を発行した。栃木町には明治11年(1878)四十一国立銀行が設置された。大正7年(1918)には桐生の四十銀行と合併し八十一銀行の支店となる。明治25年(1892)以降、栃木町の人達によって栃木銀行、栃木農商銀行、栃木商業銀行、栃木共立銀行、栃木倉庫銀行等の多くの銀行が創立された。同時期の明治26年(1893)に栃木商業会議所も設立され、県内のみならず北関東における有力商業会議所として発展した。この頃の栃木の町は米穀商・肥料商・^{べいこく}麻問屋・^{あさ}荒物問屋等の商人、高利貸資本業があり、生産業は^{ほとん}殆ど^{ぼっこう}勃興せず、生産より流通を通じて、問屋町として発展したようである。



写真 栃木商業会議所
(明治45年(1912)頃)

しかし、戦中・戦後時の配給制度も含めた流通システムの変化に伴い問屋を通ず流通は崩壊し、一部の問屋が残るのみとなった。このような中、昭和7年(1932)から昭和9年(1934)にかけては、栃木町により救済事業として太平山遊覧道路新設という一大事業が施行され、昭和の大不況での^{こんきゅう}生活困窮者を救った。



写真 太平山遊覧道路新設
(昭和7年(1932))

その後、栃木市と商業会議所も経済変化に対応するため工業誘致を^お推し進めた。代表的なものとして昭和14年(1939)の^{ひたちせいさくしょ}日立製作所栃木工場の誘致が挙げられる。

④ ^{やなかむら}旧谷中村と^{あしおどうざん}足尾銅山^{ちん}鉱毒事件

足尾銅山は江戸時代に開かれた^{こうみやく}鉱山であるが、明治時代に入り大規模な^{こうみやく}鉱脈が発見され^{さんどう}産銅量が急増した。それとともに周辺の山は^{こうはい}荒廃し、大雨が降ると^{こうみやく}鉱山からの廃棄物を含んだ土砂が渡良瀬川に流れ込み、農作物に被害を及ぼした。政府からの^{たびかさ}度重なる予防命令や経営会社古河^{ちん}鉱業の対応にもかかわらず^{ちん}鉱毒は止まず、渡良瀬川沿岸の農民による^{ちん}鉱山操業停止と補償を求める運動が激化した。明治23年(1890)の第1回総選挙で衆議院議員に選ばれた^{たなかしょうぞう}田中正造は、渡良瀬川沿岸の人々を救うため、国会で足尾銅山の^{ちん}鉱毒問題を取上げた。社会問題にまで広がったが解決せず明治36年(1903)政府は^{ちすい}治水事業によって^{とねがわ}利根川流域の洪水を防ぐとともに^{ちんでん}^{ちん}鉱毒水を沈殿させるため、^{ちん}遊水地建設を決めた。明治37年(1904)谷中村民と自らも谷中村に移り住んだ田中正造は^{ちん}遊水地建設と^{ちん}廃村に反対したが、政府は買取を進め、明治38年(1905)第1回村民の^{ざんりゅう}移転、明治40年(1907)には^{ざんりゅう}残留村民16戸を強制的に破壊した。残留村民は^{ちん}仮小屋での^{ちん}反対運動を続けたが、大正2年(1913)田中正造の死などもあり、大正6年(1917)反対運動を断念した。旧谷中村跡には、^{みづか}水塚や^{えんめいいん}延命院跡が残るのみである。

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

旧谷中村に人々が住まなくなると、その跡地には土砂が堆積し、上質のヨシが繁殖するようになり、葦よしづくりが地場産業として発展しはじめ、昭和30～40年（1955～1965）頃に最盛期を迎えるが、この頃から良質なヨシを採るために行われるようになったヨシ焼きは、3月中旬から下旬の地域の風物詩である。



写真 延命院跡

⑤ 戦後の復興

第二次世界大戦の戦時下においては、すべての物資は配給制度となって、江戸時代の初め以来培つちかってきた栃木商人の商圏は根本から覆こんぽんされ、銃後くつがえにある働き手は軍用工場に徴用じゅうごされた。

戦後においては、昭和21年（1946）からの農地改革が、再び大商人や、先祖の財産をもとに貸金的な事業を営んでいた人々に、大きな打撃を与えたが、栃木市は見事に立ち上がり、その先駆けをなしたのが下駄製造である。しかも戦前にはなかった、鼻緒生産はなおまで付随ふずいして起こった。

栃木市の下駄製造は、戦争中から終戦後にかけて急速に発展、東京や東北・北海道の市場へ進出し、広島県・静岡県等の先進下駄工業地帯と肩を並べて、三大生産地の一つにのし上がった。



写真 下駄材を円型状に積みあげて干しているところ（昭和前期）



写真 昭和13年（1938）万町巴波川が氾濫し洪水に見舞われた

巴波川は、明治時代から度々、栃木町中に氾濫し大きな被害が生じていたため、大正11年(1922)から下流の寒川(小山市)より改修工事が始められていたが、根本的な解決を図るため、赤津川への分水工事が昭和23年(1948)から始められ、昭和26年(1951)に完成した。

また、太平山南側の大平地域西地区山麓地帯においては、昭和21年(1946)に「大平下ぶどう組合」が発足し組織的なぶどう栽培が始まり、その後、土地改良が行なわれ、圃場整備事業や昭和46年(1971)に着工した県営広域農道下都賀西部地区により規模が拡大され、昭和48年(1973)に「大平ぶどう団地」が完成した。

栃木市の中心部では、大通りの西側 倭橋付近から町屋の敷地を分断する形で、北に延伸する道路が昭和25年(1950)頃から昭和30年(1955)にかけて造られ、新しい通り沿いには、店や住宅が混在する町並みが形成された。道路が建設されると間もなく市が開催されるようになった。

近代化は、大通りにも影響を与えた。昭和30年代後半から大通り両側のアーケードの設置や建物の建て替えが進み、数多く残っていた伝統的な建造物も、下屋庇部分を改造して外観を近代的な建物に見せる工夫が施され、それまでの古い見世蔵や木造店舗が通り沿いに建ち並ぶ町並みが、通りから見た目には近代的な町並みへと変貌し、中心商店街として賑わっていた。

昭和50年代になると、歴史的な町並みに着目し「蔵の街」として全国に観光PRを始め、昭和53年(1978)からは、市内5箇所(安達家、岡田家、坂倉家、塚田家、横山家)の旧家が公開されるようになった。

同時期、東北縦貫自動車道栃木インターチェンジの供用開始(昭和47年(1972))とともに市街地周辺部においては栃木環状線等の新しい道路が開通し、その沿線には新たな商業施設が展開されていたが、栃木駅前から続く大通りの中心商店街でも新たに大小のスーパーが出店するなど、平成2年(1990)の百貨店の出店まで町並みにも大きな変化が起こっている。



写真 大平ぶどう団地



写真 昭和30年(1955) 蚤の市会場



写真 昭和の頃の大通り(室町)



写真 昭和47年(1972) 東北縦貫自動車道開通

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

昭和の終り頃からは、住民と行政の協働により、歴史的資源を活かしたまちづくりを基本方針として、歴史的景観のまちづくりが進められ、平成2年（1990）からアーケードの撤去や建造物の外観の復元等が20年以上行われてきた。

このまちづくりの結果、活況を呈した時代を象徴する見世蔵や土蔵等の建物を中心とした歴史的建造物が数多く残され、こうした歴史資産を観光資源化し、関東地方では「蔵の街とちぎ」や「小江戸とちぎ」として知られるようになり、平成8年（1996）からは同じく小江戸と称する埼玉県川越市かわごえと千葉県香取市かとりとの交流を図るため、持ち回りで「小江戸サミット」を開催している。平成24年（2012）には、市中心部にある「嘉右衛門町伝建地区」かうえもんちょうが県内初の国の「重要伝統的建造物群保存地区」（以下「重伝建地区」という。）に選定された。

また、市南部にある渡良瀬遊水地ちすいりすいは、治水と利水を目的に整備され平成9年（1997）に完成した。現在も治水の機能を第一として整備され、また、貯水は首都圏に供給され、首都圏の水がめとして機能している。内陸部では国内最大級の面積をもつヨシ原はらのある湿地で、世界的に湿地が減少する中で貴重な存在となっており、ヨシ原を中心に多くの動植物が生息し、豊かな生態系が形成され、平成24年（2012）に渡良瀬遊水地の約四分の三がラムサール条約登録湿地になった。



写真 平成3年（1991）大通り（倭町）やまじょう



写真 平成11年（1999）大通り（倭町）



写真 渡良瀬遊水地 航空写真

(5) 歴史に関わる人物

栃木市には、産業や民俗芸能の発展に深く関わる人物がいる。

① 勝道しょうどう（天平7年（735）～弘仁8年（817））

勝道は、世界的にも有名な観光地にっこう、日光を開山したことで知られる。父は高藤介こうふじすけで姓は若田と名乗り、下野国府つけこくふの高官こうかんであった。母は吉田氏である。

長らく子がなく、伊豆留いずる（現在の栃木地域出流町）の千手観音菩薩せんじゅかんのんぼさつに祈願し、子を授かったといわれる。夫婦の間には「藤糸ふじいと」と呼ばれた男の子が生まれた。天平宝字6年（762）には、下野薬師寺やくしじにて具足戒ぐそくかい、沙弥戒さやかいを受けて勝道と改名した。天平神護元年（765）には、市指定文化財（建造物）の本堂と山門のある出流山満願寺さんまんがんじを開基かいきした。延暦元年（782）、男体山に数度の登頂を試みて成功し、日光を開山した。延暦14年（795）に当時の天皇より上野国内こうずけのくにの寺院・僧尼そうにを統括する僧職くわいかいに任じられた。弘仁5年（814）、空海は「沙門勝道山水を歴て玄珠を瑩く碑並びに序」で勝道の業績を記した。『遍照發揮性靈集』へんじょうほっきしやうりやうしゅうに収録されている。

また、勝道は、城山の地に華嚴精舎けごんじを建立したといわれ、この精舎は華嚴寺と考えられている。伝来したといわれる阿彌陀如来立像も残されている。華嚴寺はその後明治の初めまで隆盛を極めた。

写真 日光輪王寺 勝道上人像しょうにん② 円仁えんにん（延暦13年（794）～貞観6年（864））

円仁は延暦13年（794）、現在の岩舟地域下津原で生まれたといわれ、9歳から大慈寺の住職広智いわふねについて修行を積み、15歳で比叡山しもつばらに登って、伝教大師だいいじ最澄こうちの弟子となった。平安時代随一の学僧といわれ、斉衡元年（854）に第三代天台座主ひえいざんとなり、後に山門派てんだいざすの流祖りゅうそとされた。貞観6年（864）に71歳で天台宗の総本山である比叡山延暦寺えんりやくじで入寂にゅうじやくしている。朝廷から慈覚大師じかくだいしという「大師号」を授けた最初こうそうの高僧としても知られている。

承和3年（836）、42歳のとき最後の遣唐使として唐に留学することになり、途中2回の渡航失敗を重ね、承和5年（838）、渡海とかいに成功したが船は全壊する



写真 慈覚大師円仁

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

という経緯を経て唐に到着した。山東省の赤山法華院や福建省の開元寺、中国仏教三大霊山に数えられる五台山で修業し、唐文化や仏教思想を学び日本に伝えた。唐を旅した承知5年(838)から約10年間の旅行記が『入唐求法巡礼行記』と呼ばれ、その内容は仏教のみならず晩唐の政治・制度・文物・民俗等に及ぶ貴重な史料である。また、『入唐求法巡礼行記』はマルコポーロの『東方見聞録』、玄奘三蔵の『大唐西域記』とともに旅行記として知られている。

③ 皆川広照(天文17年(1548)～寛永4年(1627))

皆川広照は天正18年(1590)、豊臣秀吉の小田原攻めの際に後北条氏に与したが、小田原城の落城前に豊臣秀吉の傘下となり、関ヶ原の戦い後、慶長8年(1603)には徳川家康から松平忠輝の付家老として信濃国飯山藩4万石に封じられた。慶長14年(1609)には忠輝との対立から領地や城を没収されたが、再び常陸国府中藩1万石の領主に任じられ、隠居後も家光の相談役として仕え、寛永4年(1627)80歳で生涯を終えた。



写真 皆川広照肖像

④ 田中正造(天保12年(1841)～大正2年(1913))

田中正造は、天保12年(1841)、安蘇郡小中村(佐野市)に生まれた。栃木県会議員、栃木県会議長をつとめ、明治23年(1890)の第1回衆議院議員選挙に当選し、代議士時代には、明治24年(1891)の第2回帝国議会で鉱毒被害に関する質問書の提出をはじめ、足尾銅山の鉱毒問題に取り組んだ。明治34年(1901)には、代議士を辞職後、鉱毒被害の惨状と被害民の救済を訴えるため明治天皇に直訴を試みたが、失敗した。

その後は、渡良瀬川の遊水地計画の反対運動に尽力し、谷中村に移住し村民とともに村を守るために闘い、村内では破堤所を修築して村民の生活を守り、村外では在京谷中土地所有者及び旧友とともに議会や裁判で当局の不当を訴えつつ、専ら谷中村の復活を要望して日夜奔走し、大正2年(1913)9月4日、73歳の生涯を閉じた。



写真 田中正造像

⑤ ^{やまもとゆうぞう}山本有三（明治20年（1887）～昭和49年（1974））

山本有三（本名山本勇造）は明治20年（1887）栃木町に生まれた。

幼い頃から ^{しょうがく}尚学^{おうせい}の精神^{いくた}が旺盛で、幾多の苦難を乗り越え、東京帝国大学（現在の東京大学）独文学科を卒業し、^{ぎきょく}戯曲^{ぶんだん}作家として文壇に登場した。

新聞の連載小説で多くの読者の心をつかみ、特に小説『^{ろぼう}路傍の石』は何度も映画化され、青少年に多大な影響を与えて今日に至っている。また、第二次世界大戦後の第1回参議院選挙に当選し、日本国憲法の口語化や文化財保護法の新立法化など文化国家の建設、推進にあたり政治家としても活躍した。さらに、次世代の子ども達の教育面にも意を用い、小学校や中学校の国語の教科書^{へんさん}編纂にも携わり、有三の精神は学校教育の現場でも活かされている。昭和35年

（1960）栃木市名誉市民に^{すいきよ}推挙され、昭和40年（1965）には第25回文化勲章を受章した。
^{さんりゅうじ}近龍寺に墓所があり、毎年1月11日に^{ほうよう}法要が営まれている（一一一忌）。



写真 山本有三

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

4 文化財等の分布状況

栃木市には、令和5年（2023）9月1日現在で、298件の国県市の指定等文化財がある。その内訳は、国指定文化財が6件、重伝建地区が1箇所、県指定文化財が40件、市指定文化財が197件、国の登録有形文化財が54件となっている。

表 栃木市指定等文化財件数一覧

種類		国		県	市	計
		指定・選定	登録	指定	指定	
有形文化財	建造物	1	54	6	21	82
	絵画	0	0	9	12	21
	彫刻	1	0	10	32	43
	工芸品	0	0	6	8	14
	書跡・典籍	0	0	1	4	5
	古文書	0	0	0	2	2
	考古資料	2	0	0	16	18
	歴史資料	0	0	4	16	20
民俗文化財	有形の民俗文化財	0	0	1	10	11
	無形の民俗文化財	0	0	1	13	14
記念物	遺跡	2	0	2	41	45
	動物・植物・地質鉱物	0	0	0	22	22
伝統的建造物群		1	0	0	0	1
計		7	54	40	197	298

令和5年（2023）9月1日現在

(1) 国指定等文化財

国指定文化財は6件あり、建造物1件、彫刻1件、考古資料2件、遺跡2件となっている。
また、重伝建地区が1箇所となっている。

さらに、建造物を対象として、54件が国の登録有形文化財とされている。

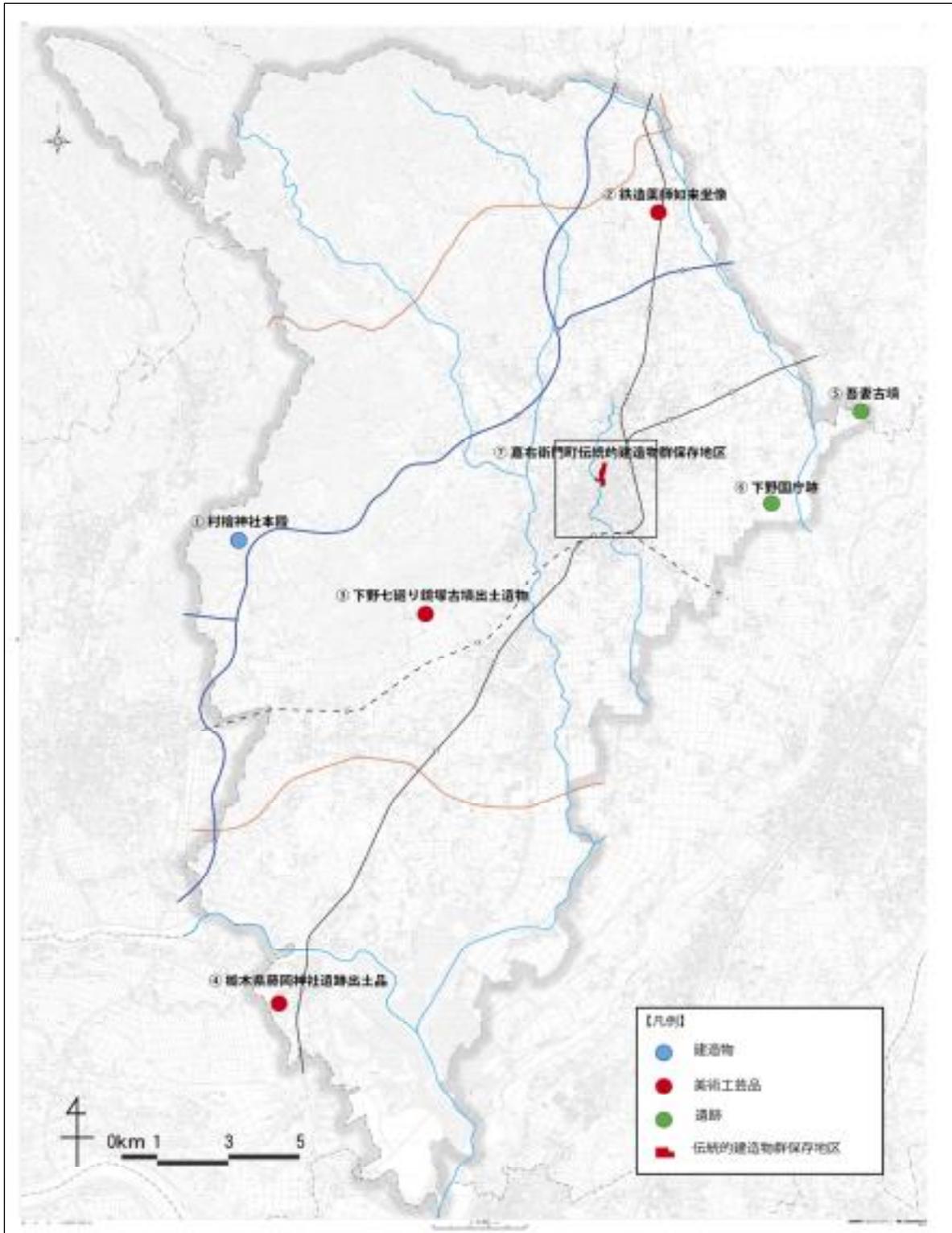


図 国指定等文化財位置図

注：「栃木県藤岡神社遺跡出土品」は市外に所在する。

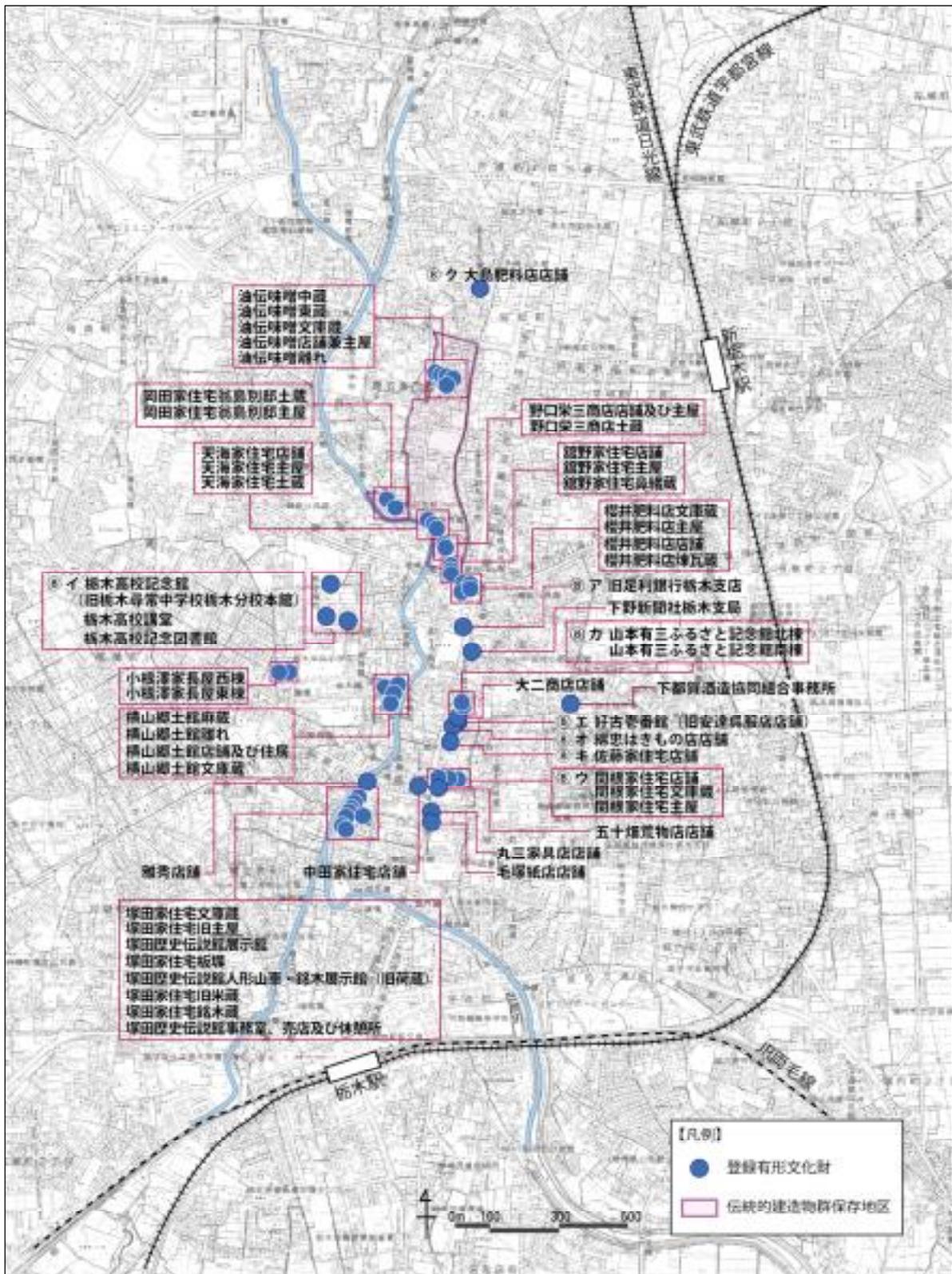


図 登録有形文化財位置図（国指定等文化財位置図の拡大図）

① 村檜神社本殿（建造物）

本殿は天文22年（1553）に建てられ、県内でも珍しい三間社春日造、屋根は檜皮葺である。小野寺保領主の小野寺氏、唐沢山城主の佐野氏等が造営にあたったといわれる。由来は平安時代まで遡り神社の敷地から出土した遺物の文字瓦は第三代天台座主円仁を輩出した隣接の大慈寺との関連性が窺える。境内には杉の大木や植物が自生して希少生物も生息し、これらは市指定文化財（村檜神社社叢）となっており、本殿とともに厳かな神域となっている。



写真 村檜神社本殿

② 鉄造薬師如来坐像（彫刻）

鎌倉時代の作で、背面に建治3年（1277）の陽鑄された銘文があり、施主、勧進した僧侶、檀那が記されるが、作者は不明である。陽鑄された銘文から河内国丹南郡を本拠とする鎌倉大仏を鑄造した丹治氏が鑄物師として関与したと考えられる。鑄鉄造で、像の高さは90.0cm、厚1.5cmであり、ごく一部に漆が残り、漆の上に金箔を重ねている。

台座も鑄鉄造で、彩色され、四重蓮華座、高さ51.0cmである。陽鑄の銘文があり野州天明大工によって元文5年（1740）に製作されたことが記される。

光背は後世に補われたものである。

同様の鉄造の仏教遺物が宇都宮氏の領土に多く分布していることから、同氏の関与が窺える。



写真 鉄造薬師如来坐像

③ 下野七廻り鏡塚古墳出土遺物（考古資料）

七廻り鏡塚古墳は昭和44年（1969）に宅地造成中に発掘された円墳である。巨大な桧材の舟形木棺と組み合わせた式箱形木棺が地下水の湧く状態で発見され、中から木装大刀2振や黒漆塗弓2張、鉾1口、鉄鏃88本、鏑矢6本、革紐付の鞞、堅櫛や毛織首飾り、馬具等が出土し、特に木・革製品の遺存状態が非常に良好であったため当時の歴史的発見となった。特に木装大刀は三輪玉が付属する1振があり、刀と鞞の構造が分かる資料である。構築時期は6世紀中頃と考えられている。



写真 七廻り鏡塚古墳舟形木棺出土状況

④ 栃木県藤岡神社遺跡出土品（考古資料）

藤岡神社遺跡で平成3年（1991）から4年間発掘調査が行われた結果、縄文時代の集落と多数の出土品が発見された。出土品の中でも、縄文時代後期から晩期（約4千年から2千6百年前）にかけての土器・土製品（土偶、動物型土製品等）829点、石器・石製品（石剣、石冠等）408点、骨角・牙・貝製品（垂飾、貝輪等）7点の合計1,244点が国の指定を受けている。また、これらの出土品は、系統的に製作されたものであり、縄文時代の精神文化や生活の様相を知る上で貴重とされた。土製品のうち犬形土製品については、同遺跡内の埋葬された犬頭骨とともに、日本の犬の系統と人との関係について注目されている。



写真 藤岡神社遺跡出土動物型土製品

動物型土製品等）829点、石器・石製品（石剣、石冠等）408点、骨角・牙・貝製品（垂飾、貝輪等）7点の合計1,244点が国の指定を受けている。また、これらの出土品は、系統的に製作されたものであり、縄文時代の精神文化や生活の様相を知る上で貴重とされた。土製品のうち犬形土製品については、同遺跡内の埋葬された犬頭骨とともに、日本の犬の系統と人との関係について注目されている。

⑤ 吾妻古墳（遺跡）

全長128mの栃木県最大の前方後円墳である。埋葬施設は、前方部中央に横穴式石室がある。奥壁、側壁は閃緑岩の一枚石、玄門（入口）は凝灰岩を加工した石で、玄室（遺体をおく部屋）の前面の側壁は川原石を積み、羨門（石室の前の入口）は凝灰岩からなる。墳丘一段目が広く、凝灰岩を加工して造られた石室を持つ。栃木県南部の古墳時代後期の古墳で基壇を持ち石室が前方部にあり切石を使用する「下野型古墳」であり、規模と特徴からその完成型と考えられている。主体部前面から桂甲小札（鎧）、形象埴輪、円筒埴輪等が出土した。銀装刀子や銀片も出土し、銀装の被葬者像が想定できる。構築時期は6世紀後半と考えられている。

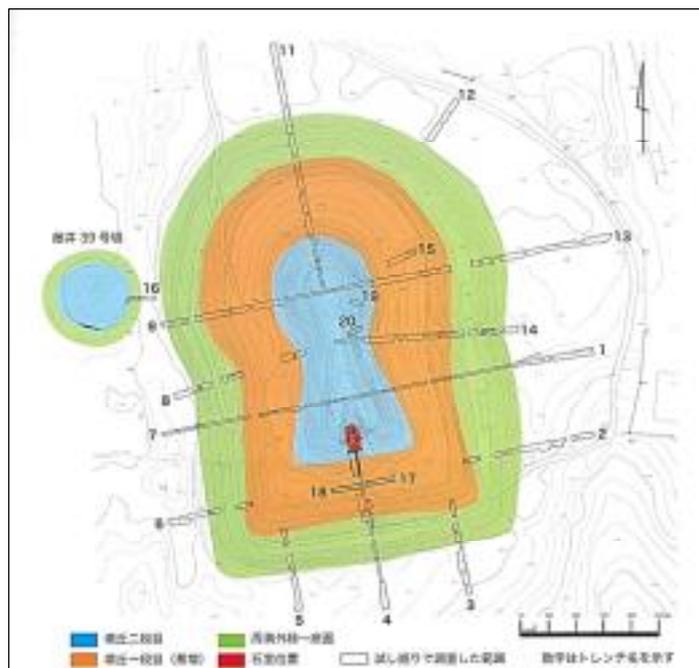


図 吾妻古墳墳丘平面図

⑥ 下野国^{こくちよう}庁跡（遺跡）

昭和54年（1979）の発掘調査により発見された。国府^{こくふ}の中心である国庁域^{ほう ちよう}は方1町（約108m）の四方の囲いの範囲^{いたべい}で、板塀と区画溝によって囲まれる。南中央に南門があり、中心部には前殿^{ぜんでん}、東西には南北に長い東脇殿^{わきでん}、西脇殿^{みぎの べ}があった。現状は宮野辺神社敷地だが、前殿の北には正殿^{せいでん}があったと考えられている。調査結果から8世紀前半から10世紀前葉まで存続し、少なくとも4回の建て替えがあることが判明した。西脇殿の西側から木簡屑^{もっかんくず}と焼土^{しょうど}が出土し、延暦9・10年（790・791）の年号が記され、建て替えに係る焼失年代も確定した。『将門記（平安時代中期頃成立）』には平将門^{たいらのまさかど}の軍が下野国府周囲で布陣^{ふじん}する姿が記されている。律令制下の地方統制の中核として設置された役所で、奈良、平安時代を通して政治・軍事・経済・交易を集約する一大拠点であった。平成6年（1994）に前殿を復元し、平成8年（1996）には「下野国庁跡資料館」を開設した。



写真 下野国庁跡前殿（復元）

⑦ 栃木市嘉右衛門町^{かう えもんちよう}（伝統的建造物群）

嘉右衛門町伝建地区の面積は約9.6haで、伝統的建造物（建築物）が92件、伝統的建造物（工作物）が36件、環境物件（伝統的建造物と景観上密接な関係にある樹木、庭園等を特定したもの）が5件である。天正年間（1573～1592）に岡田嘉右衛門^{おかだ かう えもん}が新田開発したとされ、嘉右衛門新田村^{かう えもんしんでんむら}といわれた。元禄2年（1689）には畠山^{はたけやま}氏の陣屋^{じんや}が置かれ、岡田家は嘉右衛門を代々襲名^{しゅうめい}し畠山領内の惣代名主^{そうだいなぬし}を務めた。



写真 嘉右衛門町伝建地区

南北に巴波川と日光例幣使街道^{うずまがわ にっこうれいへいし かいどう}が通り、街道沿いの敷地割りとともに、江戸末期から近代にかけて在郷町として繁栄した蔵造りの見世蔵^{ざいごうまち みせぐら どぞう}や土蔵、真壁造りや洋風の店舗が残り、変化のある町並みを形成している。

⑧ 登録有形文化財（建造物）

ア 旧足利銀行^{あしかが}栃木支店

足利銀行栃木支店として使用されていた建物で、昭和9年（1934）に建設された。切妻造鉄板葺^{きりづま}の周囲に低い壁を立ち上げ、外観を平らな屋根に見せた比較的小規模な建物であり、典型的な昭和初期の銀行建築として貴重である。



写真 旧足利銀行栃木支店

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

イ 栃木高校記念館（旧栃木尋常中学校栃木分校本館）・講堂・記念図書館

記念館は明治29年（1896）の建築で、栃木尋常中学校の栃木分校として創立された。大正7年（1918）の陸軍特別大演習の際に大正天皇の行在所となった。木造二階建、寄棟造^{よせむね}棧瓦葺^{さんがわらぶき}で、正面中央に玄関部分を張り出し、外壁は下見板張り^{したみいたば}ペンキ塗とし、規則的に上げ下げ窓を並べただけの比較的質素な建物である。一階内部は職員室や校長室、事務室など、旧本館時代の機能を留めるが、二階は大正天皇の行在所となった当時の施設（御座所^{ござしよ}や浴室）がそのまま保存されている。明治期の典型的な中学校建築であるとともに、明治・大正期の行在所の実態を知る貴重な建物である。明治43年（1910）には講堂、大正3年（1914）には記念図書館が建築された。



写真 栃木高校記念館



写真 栃木高校講堂



写真 栃木高校記念図書館

ウ 関根家住宅店舗・主屋・文庫蔵

関根家は江戸末期頃から煙草の卸売商を営み、明治初期からは「栃木煙草売捌組合^{うりべつ}」として昭和4年（1929）まで存続した。洋館（店舗）の奥には通り庭形式の住居（主屋）が続き、その奥に土蔵（文庫蔵）がある。洋館は、大正11年（1922）に建設されたが、土蔵はそれよりは古く、江戸末期（推定）である。洋館は鉄筋コンクリート造二階建、屋根の骨組みは木造で、切妻造^{きりま}棧瓦葺^{さんがわらぶき}の屋根が架けられている。



写真 関根家住宅店舗

エ ^{こうこいちばんかん} ^{あだち} 好古壺番館（旧安達呉服店店舗）

元は呉服商の店舗（洋館）で大正12年（1923）に建設された。木造二階建てで、一階正面をポーチ状に張出し、銅板葺の二段の勾配で四方向に傾斜する屋根を架け、屋根窓を設ける。柱や扁平アーチ部に石貼して石造風に仕上げるなど、大正期の意匠を良く表現している。



写真 好古壺番館（旧安達呉服店店舗）

オ ^{わたちゆう} 綿忠はきもの店店舗

^こ ^や ^{ぼり} ^{なかびきはり} ^{ぼくしよ} 小屋梁（中引梁）の墨書から安政3年（1856）の建築であることが知られる。全体的に小規模ながらも古い形式を留めており、通りに面して引き戸を用いた^{ひさし}庇付きの小窓を二つ並べ、屋根の装飾も控え目な見世蔵である。



写真 綿忠はきもの店店舗

カ ^{やまもとゆうぞう} 山本有三ふるさと記念館南棟・北棟

2棟の見世蔵が一つの屋根の下に並ぶ。建築年代は確定できないが、2棟の見世蔵が同時に建設されたものではないことは、^{のきさき} ^{いしろう} 軒先の意匠や窓の形式が異なることから明らかである。見世蔵はどちらも二階建て、^{ひらりり} ^げ ^{やびさし} 棧瓦葺、切妻造平入で下屋庇を設けている。



写真 山本有三ふるさと記念館南棟・北棟

キ ^{さとう} 佐藤家住宅店舗

切妻造平入の二階建てで正面に下屋庇を設ける。外壁は黒漆喰塗で、正面二階窓はやや縦長であるが、^{しっくい} 南妻面にも窓を設ける。全体に天井が高く、開口部も多くなっており、明治中期の建設と推定されている。



写真 佐藤家住宅店舗

ク ^{おおしま} 大島肥料店店舗

小屋裏の棟札から明治15年（1882）の建設であることが分かる。棧瓦葺の二階建てで、通りに面して下屋庇を出し、正面は左右に小さな角窓を設ける。外面は土蔵造り漆喰仕上げで軒には^{はちまき}鉢巻（軒下を厚く塗った部分）を廻らせている。



写真 大島肥料店店舗

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

(2) 県指定文化財

県指定文化財は41件あり、建造物6件、絵画9件、彫刻10件、工芸品7件、書跡1件、歴史資料4件、有形の民俗文化財1件、無形の民俗文化財1件、遺跡2件が指定を受けている。

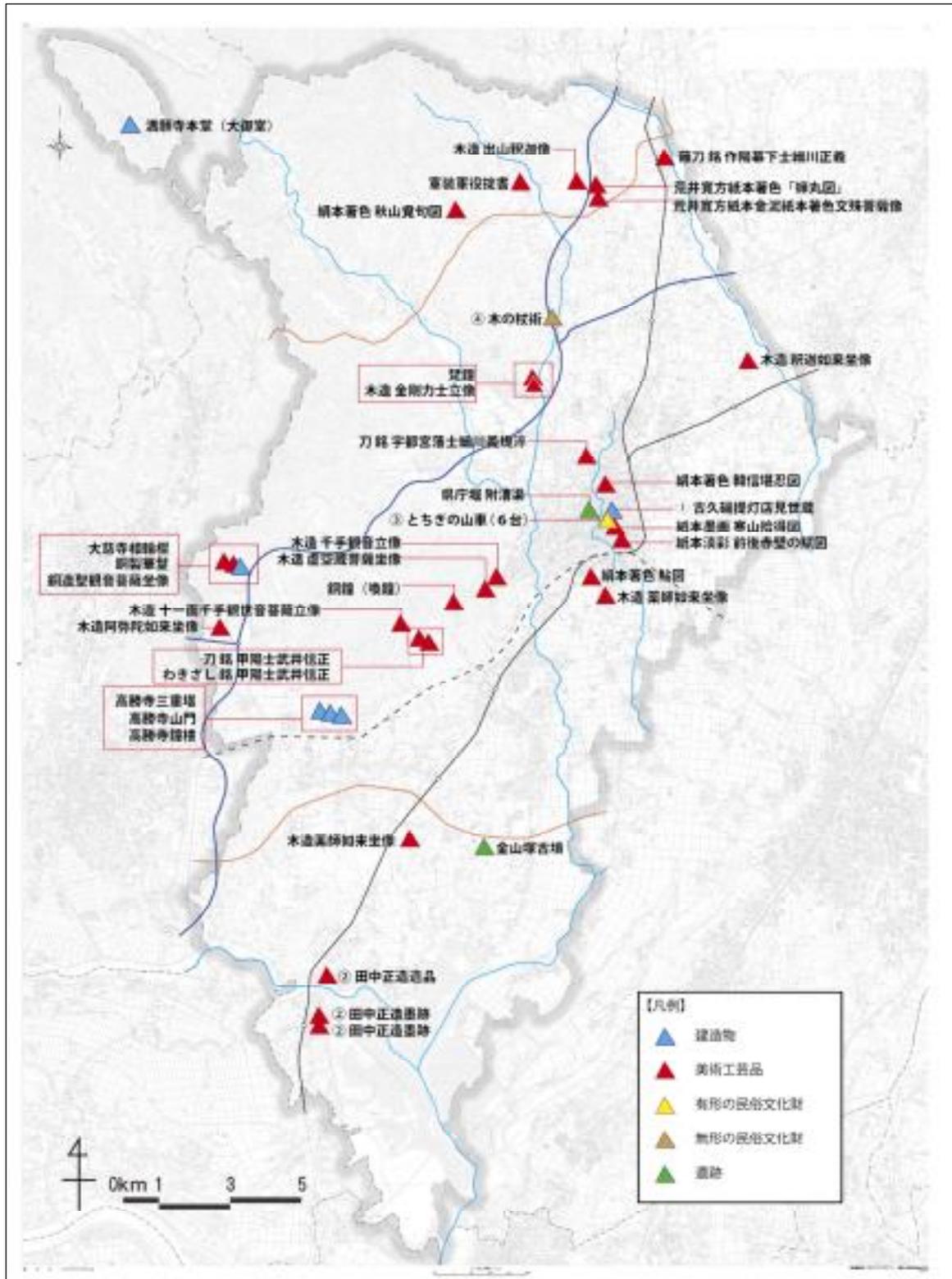


図 県指定文化財位置図

注：「絹本著色 虚空蔵曼荼羅図」は市外に所在する。
 注：所有者の都合等により公表していないものが2件ある。

① ^{こくいそちやうちんてん}古久磯提灯店見世蔵（建造物）

小屋梁に弘化2年（1845）の墨書が確認でき、現存する見世蔵の中でも古い時期の建造である。通りに面して前面に下屋庇を設け、黒漆喰の外壁で、二階窓は引き戸である。内部も当時の状態を保っており、北半分は帳場^{ちやうば}である。東側の背面には中央に両引戸が残る。二階は2室の座敷が通りに面して並んでおり、南側の1室に床の間が付く。古い時期の見世蔵として典型的な構造と手法で造られ、見世蔵という建築構造の完成度が高かったことが窺える。古久磯店は、本店から独立した後、明治末期以降に栃木地域^{よろずちやう}万町内で提灯店を営んでおり、大正年間（1912～1926）よりこの場所にて営業した。



写真 古久磯提灯店見世蔵

令和5年（2023）までは「とちぎ歌麿館^{うたまろかん}」として美術作品等の簡易展示が行われていた。

② ^{たなかしょうぞう}田中正造^{ぼくせき}に関わる遺品と墨跡（歴史資料）

明治34年（1901）に、足尾銅山^{あしおどうざん}鉍毒事件を明治天皇^{じきそ}へ直訴した田中正造に関わる遺品1件と墨跡3件の歴史資料である。田中正造は天皇直訴後、明治37年（1904）から谷中村^{やなかむら}（現在の渡良瀬遊水地^{わたらせゆうすいち}内）に居住し、遊水地計画の反対運動^{じんりよく}に尽力し、大正2年（1913）支援者まわりの途中で死去した。栃木市内では正造に関する遺品と墨跡が藤岡地域に所在しており、同氏の影響の高さが窺える。同様の墨跡や資料は佐野市や宇都宮市にもある。



写真 田中正造墨跡（個人蔵）

③ ^{だし}とちぎの山車（有形の民俗文化財）

とちぎの山車は江戸型人形山車であり、万町一丁目・二丁目・三丁目、倭町^{やまとちやう}二丁目・三丁目、室町の山車が指定されている。江戸型人形山車は三層からなり、最上部が人形、二層目が上段幕^{じやうだんまく}にかこまれた枠、そして最下部は見送幕^{みおくりまく}にかこまれた枠である。



写真 とちぎの山車

④ ^き木の杖術^{じやうじゆつ}（無形の民俗文化財）

木の杖術は都賀地域木地区に伝わる祭礼である。木八幡宮^{きはちまんぐう}の氏子^{こてんぐりゆう}が小天狗流杖術を隔年で同社へ奉納し、杖と太刀の打ち合いの演舞が行われる。中学校の文化祭で生徒による杖術の発表があり、保存と普及活動が継続的に行われている。



写真 木の杖術

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

(3) 市指定文化財

市指定文化財は198件あり、建造物21件、絵画13件、彫刻32件、工芸品8件、書跡4件、古文書2件、考古資料16件、歴史資料16件、有形の民俗文化財10件、無形の民俗文化財13件、遺跡41件、動物・植物・地質鉱物22件が指定を受けている。

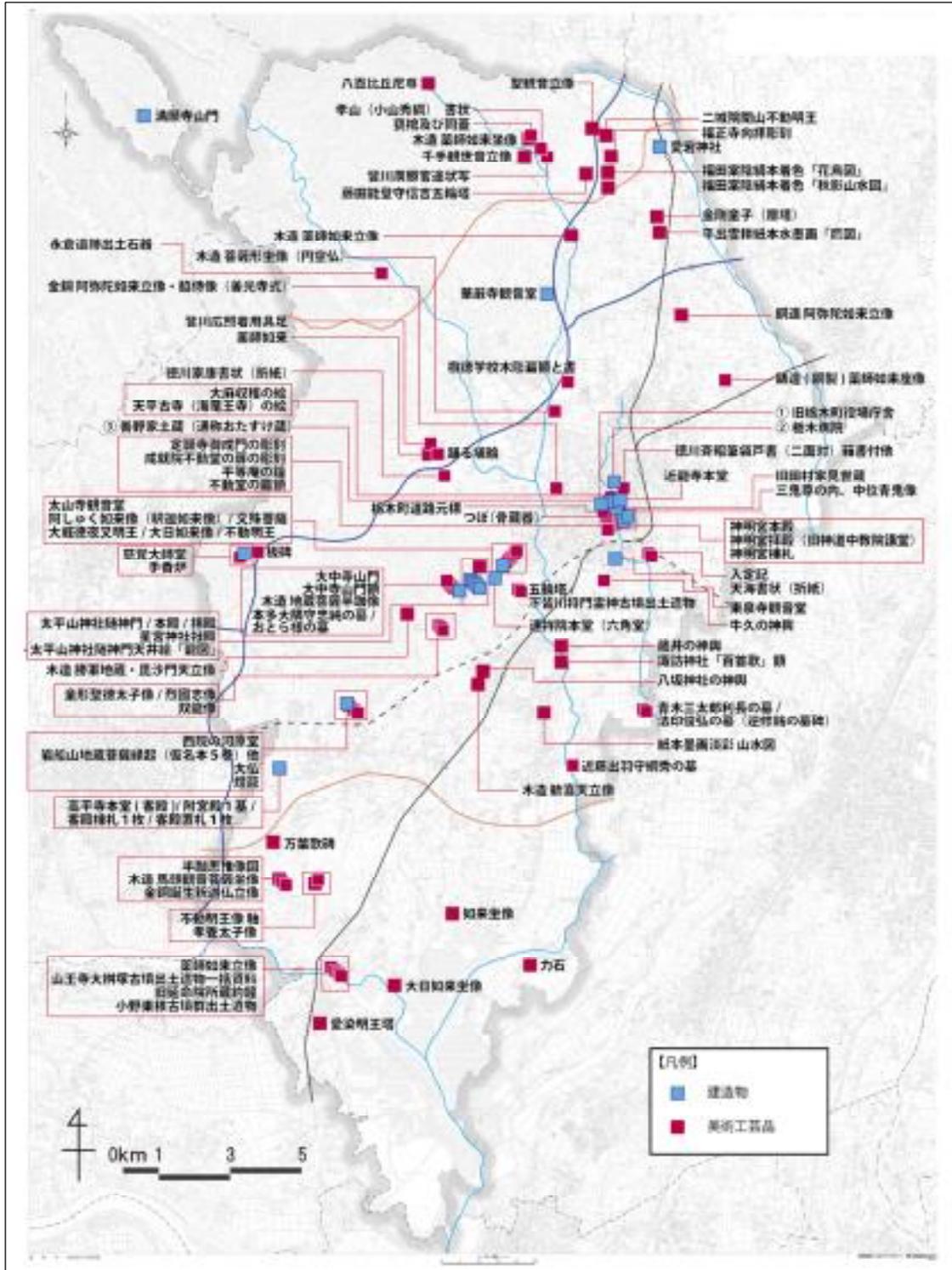


図 市指定文化財位置図（建造物、美術工芸品）

注：「田崎草雲紙本墨画淡彩『農家団欒図』」、「田崎草雲紙本墨画淡彩『鍾馗の図』」
 「徳川秀忠黒印状」「藤田信吉知行宛行状」「西方綱吉官途状（渡辺四郎兵衛あて）」
 「西方綱吉官途状（中新井主水丞あて）」「宇都宮国綱書状」は市外に所在する。

注：所有者の都合等により公表していないものが2件ある。

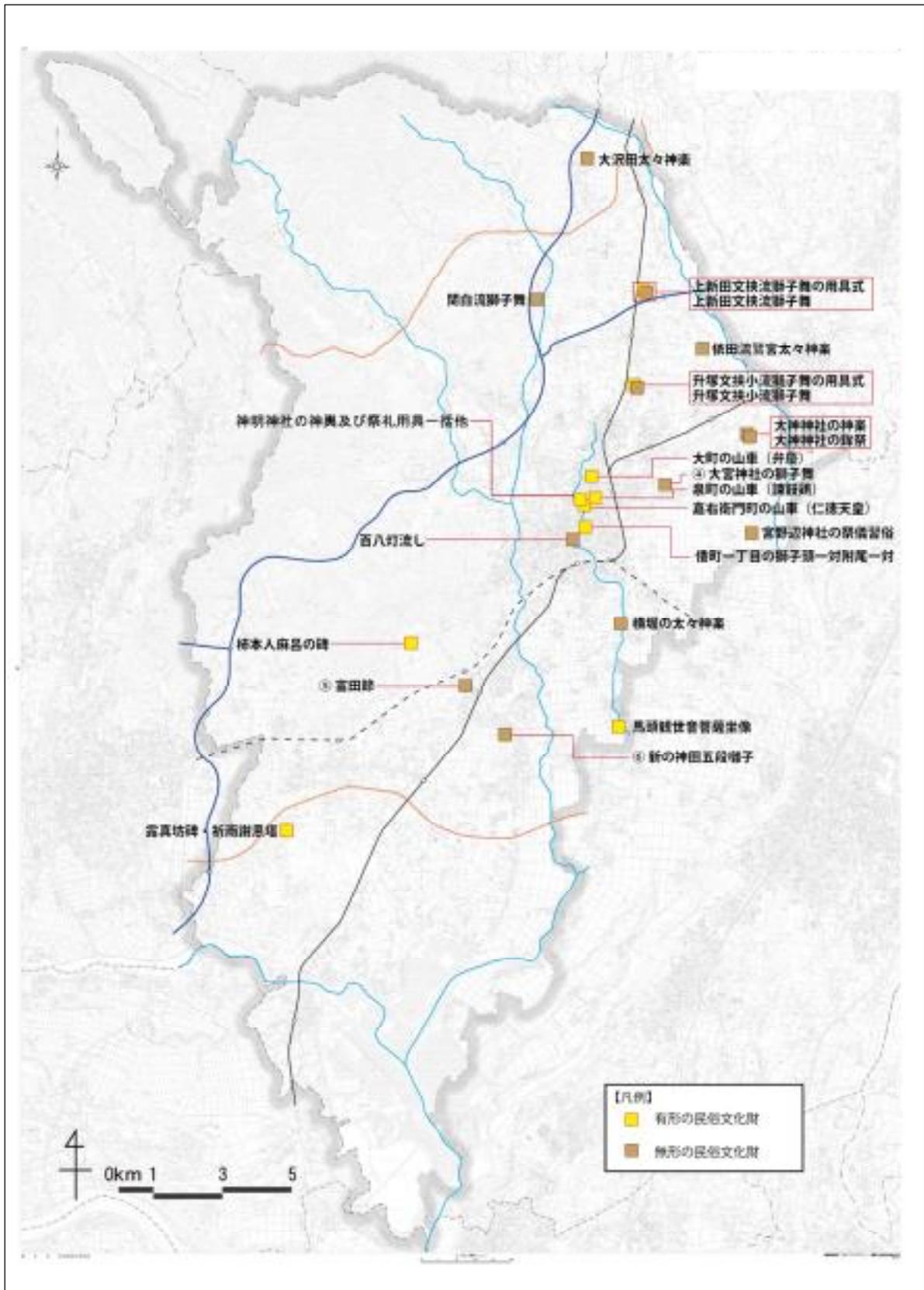


図 市指定文化財位置図（有形の民俗文化財、無形の民俗文化財）

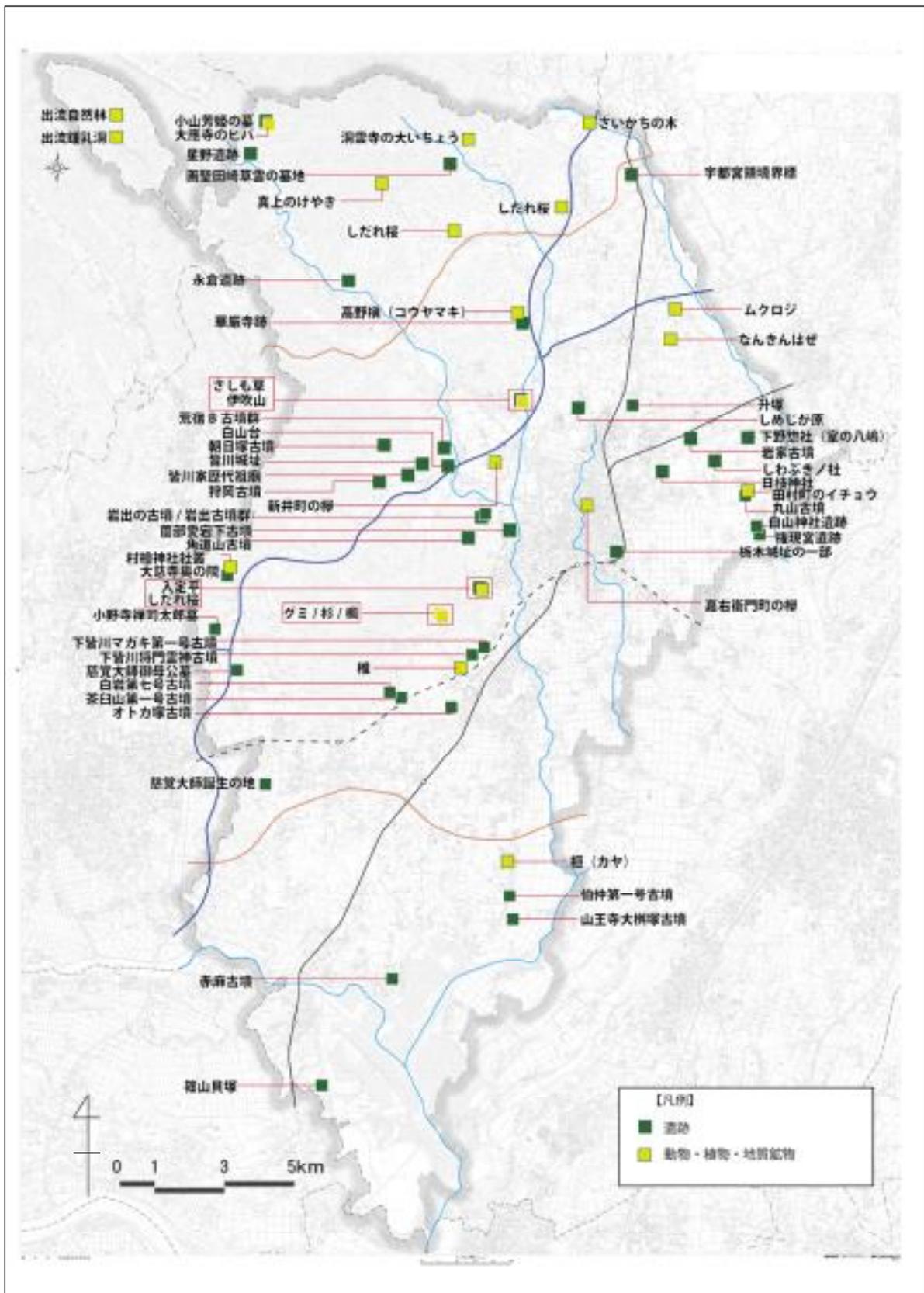


図 市指定文化財位置図（遺跡、動物・植物・地質鉱物）

① 旧栃木町役場庁舎（建造物）

大正10年（1921）に栃木町役場庁舎として建設され、昭和12年（1937）市制施行以来、市庁舎として使用されていた。木造二階建の洋風建築で、屋根の上に小塔をのせる。大きな改変がなく当時の設計図も残されており、典型的な大正期の公共建築である。現在は栃木市立文学館として使用されている。



写真 旧栃木町役場庁舎

② 栃木病院（建造物）

栃木病院は大正2年（1913）に建造された洋風建築である。木造二階建てで、外壁は木造の骨組みを現すハーフティンバー（木骨形式）で装飾的な骨組みの曲線を強調している。一階は板張りペンキ塗、二階は漆喰塗である。正面中央は吹き放ちのベランダとし、左右非対称の屋根となっており、変化に富んだ軽快な外観である。



写真 栃木病院

③ 善野家土蔵（通称おたすけ蔵）（建造物）

善野家は元禄12年（1699）以降、栃木に存続した旧家で、「釜佐」の名で知られる。土蔵は東蔵、中蔵、西蔵の3棟の質蔵であり、内部各所の墨書から、東蔵が文化年間（1804～1818）初期、中蔵が天保2年（1831）以前、西蔵は天保11年（1840）の建築であることが確認できる。西蔵が最も大きく、奥行きが2間ほど広がる。すべて二階建てで黒漆喰塗であり、前面に3棟を繋ぐ庇を設ける。屋根上の装飾も大きく、大規模で良好な造りで、3棟が連続して並ぶ様子は重厚な歴史を感じさせる。



写真 善野家土蔵

「おたすけ蔵」の名称は、江戸時代末期に困窮人救済のため多くの銭や米を放出したことに由来するとも、また失業対策事業として蔵の新築を行ったためともいわれている。

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

内部改修を行い、平成15年(2003)から令和3年(2021)3月まで「とちぎ蔵の街美術館」として建造物の公開と美術作品の展示に活用され、現在は「蔵の街市民ギャラリー」として使用されている。

④ ^{おおみや ししまい}大宮神社の獅子舞（無形の民俗文化財）

大宮神社の獅子舞は江戸時代に始まったとされ、11月の秋の大祭にて奉納される。以前の秋の大祭は、旧暦9月29日に行われていた。舞の種類は12通りあり、^{おじし めじし こじし にってん がってん}雄獅子、雌獅子、子獅子、日天、月天の役の5人で行い、笛と太鼓を鳴らして舞を行う。拝殿の西側と東側、^{あたごしや}竜神前と愛宕社前で4回の本舞を行う。



写真 大宮神社の獅子舞

⑤ ^{とみだぶし}富田節（無形の民俗文化財）

富田節は^{おおひら とみだ}大平地域富田地区で江戸時代に生まれた。同地区には^{とみだじゆく}富田宿があり日光例幣使街道が南北に延びる。第二次世界大戦後に^{すいたい}衰退したが、昭和52年(1977)に保存会が発足し^{はや うた}継承された。囃し唄とくどき唄の二種類があり、囃し唄は随時その場の雰囲気^{はや うた}に合わせて区切り、人の一生を唄う内容で踊り手全員が唄う。くどき唄は、京都大阪を舞台にした^{ひれん よんとだる}お吉・清三の悲恋を唄う内容である。道具は^{しょう}四斗樽、^{じゆばん}大太鼓、^{てっこう}鉦、^{てっこう}笛で、衣装は浴衣、^{じゆばん}襦袢、^{てっこう}まわし、^{てっこう}手甲である。



写真 富田節

⑥ ^{あらい かんた ごだんばやし}新の神田五段囃子（無形の民俗文化財）

新の神田五段囃子は「ひょっとこ囃子」と呼ばれ、江戸末期頃から伝承された。第二次世界大戦後に衰退したが、昭和54年(1979)に「新ひょっとこ囃子保存会」が発足し継承された。神田囃子の流れを組む^{こまつりゆう}小松流五段囃子で、演奏に合わせてひょっとこおかめ、その他の仮面を被った者が農民の働く姿を^{けい しぐさ}滑稽な仕草で舞い踊る。演奏譜^{ふきよく}曲はすべて口伝^{くでん}で、囃子、踊りともに熟練を要する。



写真 新の神田五段囃子

(4) 主な未指定文化財

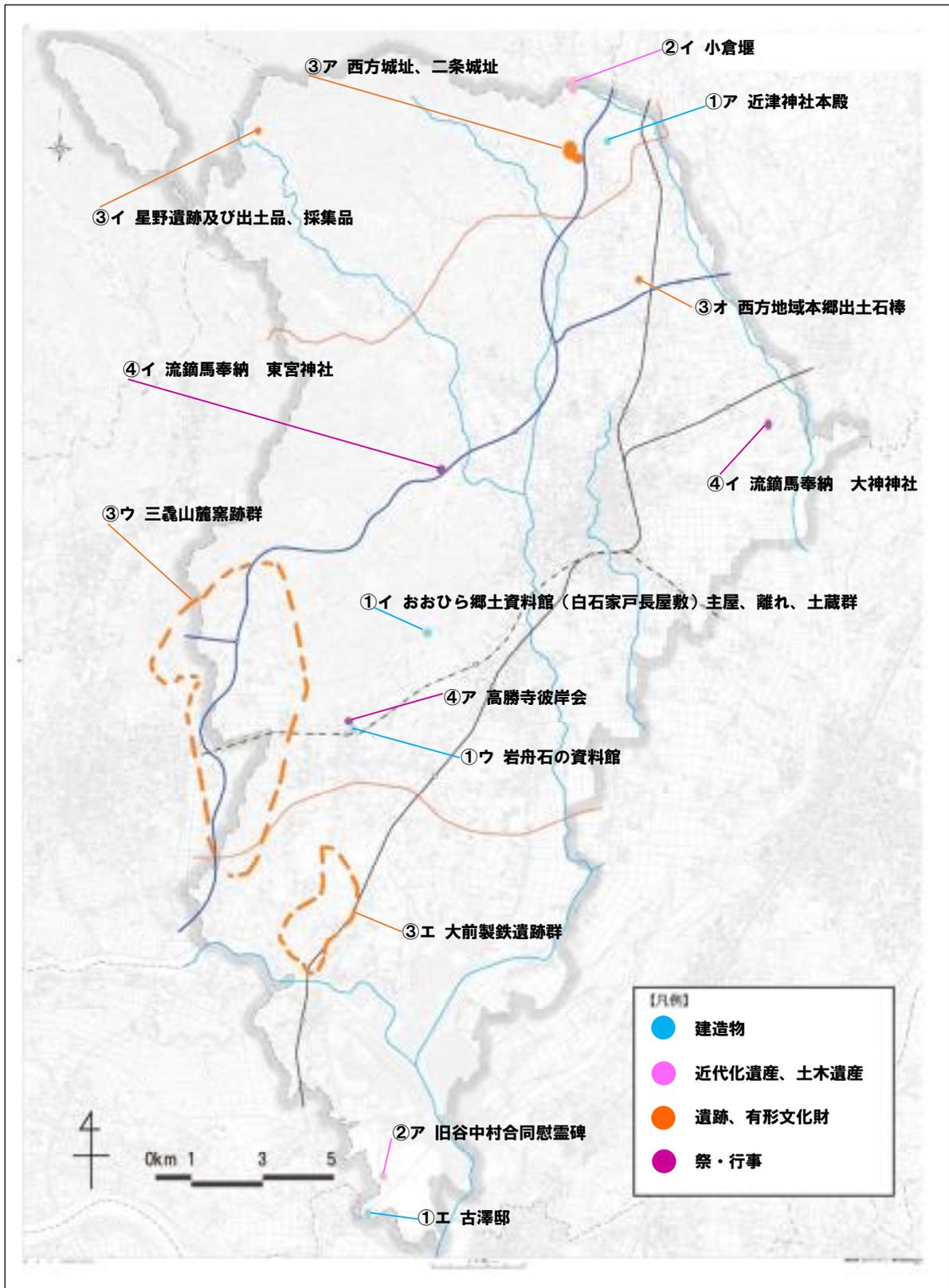


図 主な未指定文化財位置図

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

① 歴史的価値の高い建造物

ア 近津神社本殿

近津神社は西方地域にあり、村の総鎮守社である。本殿は三間社流造である。拝殿は昭和35年(1960)に改築、本殿は昭和62年(1987)に解体・彩色修理と曳家が行われている。万治元年(1658)の建築といわれ、改修時に文化13年(1816)の墨書が見つまっている。奉納された扁額には貞享4年(1687)、鉦には元禄9年(1696)の銘がある。大沢田太々神楽は本神社に奉納されている。当地域の信仰と歴史を知る上で重要な建造物である。



写真 近津神社本殿

イ おおひら郷土資料館（白石家戸長屋敷）主屋、離れ、土蔵群

おおひら郷土資料館は文政年間(1818～1830)の建築といわれる。茅葺の主屋、離れ、長屋門の他、6棟の土蔵が建ち並ぶ。主屋の玄関部と離れ、裏の蔵は瓦葺漆喰止めを施す。大正7年(1918)の陸軍特別大演習で秩父宮の宿となった。昭和41年(1966)に「栃木県緊急民家調査対象家屋」に指定され、昭和56年(1981)に旧家保全事業として長屋門と蔵が修復された。白石家は江戸時代には名主、明治初期には戸長を務めた名家である。主屋には書院造の客間があり、格式を伝える。現在は郷土資料館として活用されており、旧名家の歴史と文化を伝える重要な建造物である。



写真 おおひら郷土資料館 主屋

ウ 岩舟石の資料館

岩舟石の資料館は昭和6～7年(1931～1932)にかけて建築された洋館風の建物である。昭和初期の不況は深刻で、石工の細工技術の保存と救済を目的として建てられた。二階建てで切り出した安山岩質角礫凝灰岩(通称岩舟石)を内装、外装に使用する。石表面にはノミ痕が筋状に見られ、切石を連ねることで線状に見える装飾効果を得ている。古墳時代から利用された石材である岩舟石が現代も利用されており、廃坑となった碎石場とともに地域に産出する石材の歴史が分かる重要な建造物である。



写真 岩舟石の資料館

エ ^{ふるさわ} 古澤邸

古澤邸は移築された住宅で、当時蚕種商^{さんしゅしょう}を営んでいたが、明治39年(1906)河川法適用による旧谷中村の廃村後、明治41年(1908)に現在の地へ曳家を行い移住した。明治12年(1879)の建築と伝えられている。当時の当主は移住後も桑畑^{くわはた}の租借^{そしやく}や養鯉^{ようり}の請願^{せいがん}を行った記録が残され、衰退した谷中村住民や新規移住者に仕事を用意しようとした意図が窺える。曳家の際の写真も残っており、当時の農村の建築技術と谷中村の歴史を伝える重要な建造物である。



写真 古澤邸

② 歴史的価値の高い近代化遺産、土木施設

ア ^{いれいひ} 旧谷中村合同慰霊碑

旧谷中村内に点在していた墓石^{ぼせき}、野仏^{のぼとけ}があることが明らかとなり、長年の調整を経て昭和45年(1970)、「旧谷中村合同慰霊碑建設促進協議会」が発足し、昭和48年(1973)に旧谷中村内に点在していた墓石、野仏を1箇所に集めて合同慰霊碑を設立した。合同慰霊碑には旧谷中村住人の先祖や工事中の殉職者^{じゅんしよくしゃ}も含まれ、当時の県知事の書が記される。集められた野仏には、延宝4年(1676)から嘉永2年(1849)までの青面金剛^{しょうめんこんごう}が描かれる庚申塔^{こうしんとう}や、十九夜塔^{じゅうくやとう}、馬頭観音塔、念仏塔等55基が確認できる。近世の信仰、遊水地化による近現代の歴史が一堂に会する重要な場所である。



写真 旧谷中村合同慰霊碑

イ ^{おぐらげき} 小倉堰

小倉堰は西方地域の北端に位置し、西方地域と都賀地域の一部にわたる灌漑用水^{かんがい}と防火用水、生活用水を供給する思川^{おもいがわ}の取水堰^{しゅすいげき}で慶長年間(1596~1615)に造られたといわれ、江戸時代には名主や百姓によって維持管理されていた。昭和6年(1931)には三連巻上樋門^{まきあげひもん}と樋管^{ひかん}を改修し、昭和29年(1954)には井堰^{いげき}と仮堰^{かりげき}の固定堰化、土砂吐樋門^{とひもん}と魚道工事^{ぎょどう}を行った。昭和53年(1978)には洪水で流された堰体下部^{せきたい}の改修を行った。江戸時代以降、連綿^{れんめん}と維持管理と改修を行っており、水利によって地域組織の構造と歴史に多大な影響を与えた遺産である。



写真 小倉堰

③ 歴史的価値の高い遺跡、有形文化財

ア 西方城址、二条城址

西方城址と二条城址は中世、近世初頭の山城と陣屋である。西方城址は南北に延びる尾根上の曲輪（城の人工的な平坦面）と東西に曲輪を持ち、十字形の広がりを持つ。二条城址は丘陵頂部に主郭を置き、西側尾根筋に二重の堀を配している。両城址は現在も堀や土塁が良好に残されている。西方城の城主は宇都宮氏一族の西方氏で、文献史料上戦国時代末期から確認できる。宇都宮氏側の勢力として最前線に位置した。二条城は江戸時代になり新たな領主となった藤田信吉が築いた陣屋と考えられている。中世後期から近世初頭の地方城郭としての姿が残され今後調査が望まれる重要遺跡である。



写真 西方城址、二条城址

イ 星野遺跡及び出土品、採集品

星野遺跡は旧石器時代から縄文時代の遺跡であり、昭和40年（1965）、地元の住民が採集した石核がきっかけとなり、東北大学の調査が行われた。5次調査まで実施され、13層の文化層が確認された。当初は前期旧石器時代の可能性が示されたが、石器の技術系統、土層の年代等については議論がある。栃木市は平成10・11年（1998・1999）、「星野遺跡地層たんけん館」と「星野遺跡憩いの森」を整備し、遺跡と出土品の重要性について普及を図った。国内の旧石器時代に関連する学問的重要度が高い遺跡と資料である。



写真 星野遺跡出土品、採集品展示

ウ 三毳山麓窯跡群

三毳山麓窯跡群は栃木市と佐野市に跨る三毳山周辺に分布する古代瓦、須恵器の窯跡である。7世紀後半には生産が開始され、9世紀まで続いたと考えられている。製作技術系統から群馬県西部の影響を受けたと考えられている。8世紀には国府、国分寺、国分尼寺に瓦を供給しており、国府による統治の強い影響下にあったと考えられている。また、県内の益子窯跡群や宇都宮窯跡群に技術、形態的影響を与えたことが判明している。数多くの窯跡が残され、当時の技術のみならず奈良平安時代の地方体制や、支配層の経済基盤、近隣の大慈寺など、仏教との関わりが推測されている重要な遺跡である。



写真 三毳山麓窯跡群

エ おおまえせいでついでいせきぐん 大前製鉄遺跡群

大前製鉄遺跡群は製鉄炉の遺跡群で、河川に浸食された台地の谷に造営され、東西約2km、南北約4kmの範囲に総数22地点に分布する。採集品から製錬炉で素材鉄を生産したと考えられ、操業時期は9世紀前半から10世紀中葉と考えられている。

同地域の後藤南遺跡からは鉄鍋の鋳型が、藤ヶ丘遺跡群では鍛冶滓付着須恵器が出土し、製錬から加工までを行った可能性が指摘されている。百目貫遺跡では2×7間の長い掘立柱建物が発見され、地域権力層との関係を示唆できる。平安時代の鉄生産技術と交易、地域権力の経済基盤と武士団発生の関連性を解明する上で重要な遺跡である。



写真 大前製鉄遺跡群 航空写真

オ 西方地域本郷出土石棒

西方地域本郷地内から全国最大級の石棒が出土している。都賀地域の住民が砂利採取中に、地下約320cmのあたりに横向きの状態で発見した。全長205cm、径15cm、重量約70kgで、石質は砂岩である。縄文時代中期から晩期頃と考えられる。全体に熱を受けて変色するが下部約三分の一は変色していないため、石棒を直立させて火を焚いた可能性が高く、儀式に使用されたと考えられている。長野県佐久穂町北沢にある全国最大の石棒(全長223cm)に次ぐ大きさである。発見地が川であった可能性があり、当初の使用場所から流れたとも推測されている。



写真 西方町本郷出土石棒

④ 歴史的価値の高い祭・行事

ア こうしょうじ ひがんえ 高勝寺彼岸会

高勝寺は伯耆(現在の鳥取県)大山寺の弘誓坊明願が宝亀年間(770~781)に開山したと伝えられる。古くから霊魂の集まる霊場として信仰を集め、岩船地蔵の名で知られる地蔵菩薩を本尊としている。

毎年、高勝寺では、3月18日~24日頃に「春の彼岸会」が、9月20日~26日頃に「秋の彼岸会」がそれぞれ開かれている。

彼岸会には関東一円から多くの参拝者が訪れており、参拝者は、本堂の内陣前に立てられた塔婆の前に座り、僧が参拝者に応じた読経を行い、読経を終えると参拝者が本堂西側の霊場といわれる幾体もの地蔵菩薩が立つ崖に塔婆を立



写真 高勝寺境内

第1章 栃木市の歴史的風致形成の背景

て、供養としている。また、小塔婆は、本堂前の香炉こうろの傍そばで棚に上げて供養する。僧の読経は境内に響き渡り、厳げん肅しゆくな雰囲気けいのなか、苔こけむした岩肌いに数十以上の塔婆たがかかる様子は荘そう厳ごんである。中世以降の岩船山地蔵信仰が現代まで受け継がれている重要な伝統行事である。

イ 流鏝馬奉納やぶさめ

栃木地域みながわじょうないまち皆川城とうぐう内町にある東宮神社と、栃木地域そうじやまち物社町おおみわの大神神社では、流鏝馬奉納が行われている。

流鏝馬は、丸や四角の3つの標的まるおうぎ（東宮神社は開くと30cm程の円形になる丸扇、大神神社では四角い杉板）を、早稲（わせ）・中稲（なかくて）・晩稲（おく）として、馬上からかぶら鏝や矢いを射る。矢が命中した標的によって、その年に植える稲の種類を決める。

東宮神社では、かつては5月13日、14日に行われていたが、現在は、5月第1週目の日曜日に行われている。起源は不詳であるが、永享元年（1429）、皆川氏かすがが城を築くにあたり、奈良の春日神社かんじょうを勧請した際の行事と伝わり、昭和31年（1956）の『栃木市政だより』に、「神殿の後方に馬場があつて毎年五月十四日の春の大祭には、神馬の奉納、流鏝馬の式があり又競馬も行われ当日の人出は数万に上ります。」との記載がある。流鏝馬に参加した者にボンデン（梵天）が授けられ、雷・災難除けごこくほうや五穀豊穰じょうのお守り、農家では馬屋うまやの柱かに飾り、家屋のお守りとしている。



写真 東宮神社の流鏝馬奉納

また、大神神社では4月16日の春の例大祭に飾り馬と流鏝馬が行われる。起源は不詳であるが、明治36年（1903）4月20日発行の『下野神社沿革誌』の大神神社の覽に記載がある。江戸時代には国府町の島田氏6家はんがんが「判官」という祭礼役となり飾り馬と米10石を奉納、田村町たむらまちの長氏いが代々て射手（弓を射る人）を務めたといわれる。標的を持つ人は当たると声をあげ、馬が通り過ぎた後はお守りとされる板を参加者が奪い合う。かつては流鏝馬奉納後に馬の曲乗りや手拭い取りなどが披露され、さじき棧敷たてがみが組まれて、そこから見る事ができた。

どちらの神社においても、ザンザと呼ぶ鬘たてがみ飾りや布団で馬を飾り、地区内を練り歩いた後、神社へ向かい、神社では装飾が解かれ、流鏝馬の馬となる。飾りは氏子や参加者に配られる。かつては地元農耕馬のうこうばを使用していたが、現在は、他市の牧場から馬を呼んでいるとともに、射手も他市から呼んでいるという。流鏝馬奉納は、農村の稲作に関わる年占い神事として共通しており、今も地元の氏子達によって、大切に受け継がれている。

～コラム～

「野州麻^{やしゅうあさ}の生産用具」

栃木市・鹿沼市周辺地域で麻の栽培と麻繊維の生産に使用されたタイマハシユキ（大麻播種器）、アサキリボウチョウ（麻切り包丁）、オブネ（麻槽）等の用具類を県が取りまとめ、その資料群が、平成20年（2008）3月13日に重要有形民俗文化財に指定され、県立博物館に所蔵されている。栃木県で生産される麻は、野州麻として知られ、第二次世界大戦後まで盛んに生産が行われていた。特に市北部の都賀^{つが}地域や西方^{にしきた}地域で麻は栽培され、栃木町の麻問屋にも販売されていた。

野州麻の生産工程は、堆肥^{たいひ}作り、地ごしらえ、麻の種まき、施肥^{せひ}、中耕^{ちゅうこう}、くず抜き、麻抜き、根切り、葉打ち、生麻束ね、麻切り、湯かけ、麻干し、床臥せ、麻はぎ、麻ひき、麻掛けなどの作業が順次行われ、工程ごとに各種の用具を用いて作業が行われる。

麻は日本の伝統的な植物繊維で、木綿利用が一般化する前には衣料の代表的な素材でもあった。野州麻の資料群は、麻の生産地で用いられてきた用具が体系的に収集されたもので、麻の伝統的な繊維生産の有り様を示す文化財として重要である。

現在、栃木市内では麻の生産は行われていないが、当時、使用されていた代表的用具等は市内の資料館等で展示保管している。



写真 野州麻の生産用具（栃木県立博物館所蔵）

(5) 栃木市の主な特産品

① しもつかれ

しもつかれは、ぶつ切りにした塩引き^{しやけ} 鮭の頭に、^{あら}粗くすり下ろした大根や人参、炒った大豆、^{さけかす}酒粕等を加えて煮込んだもので、古くから伝わる^{はつうま}初午の行事食である。この日に7軒のしもつかれを食べると病気になるまいといわれている。



写真 しもつかれ

② モロ・サガンボ料理

モロ・サガンボとは鮫肉の通称である。

鮫の肉は鮮度が落ちるとアンモニアを生じてしまい、一般の魚のような料理には向かない。ただし、アンモニアがあるために腐敗が遅く、冷蔵技術が発達する前の内陸部では海の幸として^{ちんちよう}珍重されていたため、栃木市では身近な魚料理として今もなお文化が残っている。

一般的には鮫はすり身に^{かまぼこ}し蒲鉾やはんぺんに加工されることが多いが、栃木市では煮付けやフライとして昔から食されている。



写真 モロ料理

③ ^{なまず} 鯰の天ぷら

^{わたら}渡良瀬川、^{せがわ}巴波川、^{うずま}思川が流入する藤岡地域には、^{わたら}渡良瀬遊水地ができる以前は多くの小さな沼が存在し、江戸時代よりこれらの沼では^{こい}鯉や^{ふな}鮒、鯰等の川魚の漁が盛んに行われていた。これらの川魚は海の無い栃木県において貴重な食材として昔から食されてきた。特に鯰の天ぷらは昔ながらの藤岡地域の郷土料理である。



写真 鯰の天ぷら

今でこそ提供する店は少なくなってしまっているものの、^{たんぼく}淡泊でくさみの少ない鯰の天ぷらは今も昔も変わらず地元で愛されている。

④ 鮎ふなの甘露煮かんろに

古くから川魚漁が盛況だった藤岡地域では、江戸時代の昔より川魚を料理する店の暖簾のれんがはためいており、今でも往時の名残おうじともいべき甘露煮店がいくつか残っている。

特に鮎の甘露煮は昔から藤岡地域の名産品であり、丁寧ていねいに泥抜きされた鮎は川魚特有の臭みもなく、長時間じっくりと煮込んだ甘露煮はこってりとした甘さはあるが、まろやかでしつこさはなく、とても上品な味である。



写真 鮎の甘露煮

⑤ いちご

いちごは、栃木県の農産物における主要品目であり、県の野菜の農業産出額の約3割を占めている。特に「とちおとめ」は栃木地域大塚町おおつかまちにある栃木県農業試験場いちご研究所で育種、誕生した品種であることから、栃木市の「とちおとめ」の生産は栃木県内でも1、2位を争う歴史の長さほこを誇っている。

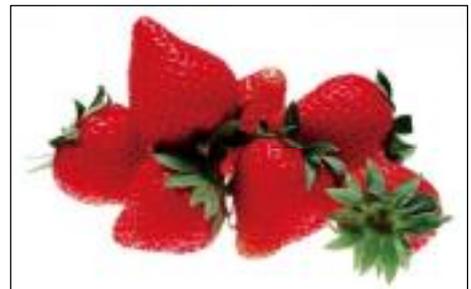


写真 いちご（とちおとめ）

⑥ ぶどう

大平地域おおひらの大平ぶどう団地や岩舟地域いわふねでは、水はけのよい緩斜面と温暖な気候といった条件を活用して、巨峰きよほうをはじめ、シャインマスカット、ハニービーナス、ベリーA、ピオーネ、キャンベル、デラウェアなどが栽培されている。大平ぶどう団地は観光農園の規模として北関東最大であり、70を超えるぶどう園がある。



写真 ぶどう（巨峰）

⑦ トマト

栃木市におけるトマト栽培の歴史は古く、昭和30年代から始まっており、冬季の日照時間が長いという気象条件を活かし、太陽の光を好む冬春トマトの栽培が盛んである。栃木市では、独自の環境風土、高い栽培技術及び徹底した生産管理のもと赤い恋人、スーパーファースト、ふじ娘むすめ、カクテルトマト、桃姫ももひめ等の高品質なトマトが生産されている。



写真 トマト（ふじ娘）

⑧ 姫きゅうり

姫きゅうりの栽培は、全国的に少なく、栃木県内でも栃木市だけで長年栽培されている希少品目で、栃木市を代表する農産物の一つである。

通常のかきゅうりの半分くらいの長さ(14~15cm)が特徴で、皮が軟らかく味が濃厚で、生で食べたり浅漬にしたりするのに適したきゅうりである。現在では、ハウス栽培により年間を通して生産が可能となっている。



写真 姫きゅうり

⑨ ^{みや}宮ねぎ

宮ねぎは、栃木市の伝統野菜であり、長年栃木地域^{みやまち}宮町を中心に生産されており、別名「ダルマねぎ」とも呼ばれている。

江戸時代に栃木の商人が江戸の地頭^{じとう}役所に出向くときに宮ねぎを持参したところ、味や香りがよいことから、江戸に毎年歳暮用として送る風習が続いたと伝えられている。

一般的な長ネギとは異なり、軟白部^{なんぱくぶ}が太く短いねぎで、寒さが深まり降霜にあうと、葉部^{はぶ}は先端^{おうへん}から黄変し、軟白部の甘みが一段と増す。



写真 宮ねぎ

⑩ 大平かぼちゃ

大平かぼちゃは、かぼちゃ栽培に適した自然環境である大平地域のみで栽培されており、生産者の高い技術とこだわりを持って長年栽培されている。

^{しよくみ}食味にこだわるため、出荷にあたり厳しい基準を設けており、市場における評価は、一般のかぼちゃより好評を得ている。



写真 大平かぼちゃ

(6) 栃木市の主な工芸品

① 桐下駄きりげ た（栃木県伝統工芸品）

江戸時代より栃木は下駄の産地で、特に北関東一帯に産する野州桐や しゅうきりは質が高く、有名である。桐下駄は軽くて履きやすく、温かいのが特徴であり、文献にも安政の大地震で、江戸市中が灰塵かいじんに帰した際、形そのままに栃木の桐下駄が大量に灰の中から発見され、江戸の市民に愛用されたとある。絵柄を掘る、草履表ぞうり おもてを貼る、塗る、鼻緒をすげるなど、それぞれ数十年の年季が生んだ技が今も続いている。



写真 栃木の桐下駄

② 鬼瓦おにがわら（栃木県伝統工芸品）

瓦には、数多くの種類があるが、「鬼瓦」は奈良時代の鬼瓦に源流があり、洗練されたなかにも、勇壮、華麗さを誇るものである。屋敷や館を守り家内安全の魔よけとして言い伝えられており、特に神社仏閣のものは複雑で特殊な技術が必要とされ、その職人を鬼師おにしと呼ぶ。

「栃木瓦」の歴史は、江戸末期に遡る。瓦に適した豊富な粘土や、燃料用の材木を産出する山々を後背地とした瓦製造は、大消費地の関東地方をひかえていたこともあり、隆盛りゅうせいを極めた。

現在も巴波川沿いの土蔵や古い家屋の屋根に使われている。



写真 栃木鬼瓦

③ 樽きづち（栃木県伝統工芸品）

主に県内産の杉を材料とし、作業は数十種類あるカンナなどを使用し、冬に切った真竹でタガを編み込み木槌で叩いて締めていく。醤油樽等の実用品としての利用のほか、装飾にも用いられている。



写真 栃木の樽